

子どものためのミニストーリー

- ・ここでは、子どもの誕生から小学6年までの時期を取り扱っています。
- ・家庭での子育てのため、教会学校の活動のために用いてください。

目次

第1章 子どもの発達

発達課程を学ぶにあたって

誕生～1歳

1歳児

2歳児

3歳児

4～5歳児

小学1～2年生

小学3～4年生

小学5～6年生

第2章 子どもと環境

遺伝と環境（文化）

経験と信仰の関係

家庭の役割

教会の役割

子どもの性質

社会的発達を促すために

現代の文化の影響

家庭の問題 仲の悪い両親

別居中の両親

離婚した両親

虐待

薬物中毒

ストレス

死

第3章 子どもと聖書・神様

子どもに関する聖書の教え

何歳から自分の罪に対して責任があるのか

子どもの救いのためにできること
神の概念の形成
間違った概念
祈り

第4章 子どもの学び

子どもの学びの特徴
教育目標
聖書的方法
子どもの礼拝
プログラム
 保育科クラスの例
 幼稚科クラスの例
世代を超えたプログラム
評価
競争
叱り方
音楽
遊び
おもちゃ
食べ物
図書
記念日、祝日
世界宣教
保育室（ナーサリー）

第5章 特別な必要のある子どもたち

身体的障がい
聴覚障がい
視覚障がい
学習障がい
知的障がい

文献

著者紹介

第1章 子どもの発達

発達課程を学ぶにあたって

・ここに挙げられているのは、一般的な発達特徴です。すべての子が似たような発達過程を通ります。人間の発達課程は、神が私たちに与えてくださっているものです。発達理解は心理学や教育学の領域であって、聖書的でないと考えることは間違いです。発達課程を正しく理解しないと、聖書や人間を正しく理解することができません。

・子どもたちは一人ひとり違ったスピードで成長します。どの子にもその子だけのユニークさがあります。子どもの成長は「山あり谷あり」が普通です。

・たとえ一般的な発達課程に合わなくても、「遅れている」とか「異常」という診断を下す必要はありません。

誕生～1歳

建物の土台が大切なように、乳幼児の時期がその後の人生の方向性を決めます。人生の最初の2年間ほど、多くのことを速く学習できる期間はありません。

誕生～3ヶ月

新生児は、喜びと可能性と霊的信頼そのものです。お母さんの快適な胎内から出て、自分の体を維持していかなければなりません。新生児の「仕事」は成長することです。

・頭が身長 $\frac{1}{4}$ あり、手足は相対的に短く、お腹が出ています。手は握っていることが多く、足はがにまたです。肌はピンクがかり、シワがあって、薄い。男児の方が女児より少し大きく重い。体重は半年後に倍になり、1年後に3倍になります。

・新生児にとって身体的必要が中心です。食べることと寝ることが一番大切です。一日18～20時間寝ます。起きている時は、おっぱい、おしめなどの世話をする必要があります。泣いている時は何かをして欲しい時です。泣いた時に、大人がどのように対応してくれるかを通して、自分の置かれている環境を学びます。

近年、新生児の味覚、嗅覚、聴覚がかつて考えられていたよりも敏感であることがわかってきました。体全体で痛さ、暑さ、寒さを感じることができます。

赤ちゃんは触れることで多くを学びます。自分の母親の声がわかります。何でも口に入れます。2、3ヶ月までに動いている物を目で追いかけることができます。のどをならし始めます。

新生児には、たくさんの感覚的刺激を与えてあげることが大切です。

4～6ヶ月

・新生児よりも活動的になります。寝返りをうったり、座ることができるようになります。新しいものに興味を持ちます。家族を見分け、離れると泣いたりします。物をつかむことができるようになり、おもちゃなどをしっかり握ります。つかんでいたものを放して落とすことを、おもしろがります。

7～9 ヶ月

・最初の歯がはえます。歯が生える時にむずがります。はいはいを始め、つかまり立ちもするようになります。いろいろなおもちゃに興味を示します。とがった角がなく、のどにつまることのない大きさで、無害なペイントのおもちゃを選びましょう。興味を妨げられると、怒るようになります。個性がますます現れるようになります。

周りの人の情緒的メッセージの意味していることがわかるようになり、何をしてはいけないかを学べるようになります。

10～12 ヶ月

・固形物を食べることができ、コップから飲むことができます。一人で立て、歩ける子もいます。探索が大好きなので、危険にならないように守りながら探策させてあげるとよいでしょう。大人に対してさらに反応できるようになります。イナイイナイバーなどの遊びを好みます。くっつけたり、分けたりできるおもちゃで刺激を与えましょう。この時期は、本を読み始めるのにふさわしい時です。単純な絵と1ページに1語くらいの絵本がよいでしょう。

神経と筋肉のコントロールが、頭から始まり体の下方向に向かって進んでいきます。腕の上部から指先へ、足の上からつま先へと発達が進んでいきます。

1歳の時に、2～6本の歯がはえています。

誕生から1歳までの乳幼児に大切なこと

・1歳までは、身体的な必要に対して愛情をもって満たしてあげることが大切です。そうすることが後の霊的、知的、情緒的、社会的発達につながります。そして人生全体にわたる基本的安心感と信頼が形成されます。この信頼が信仰の土台になります。

大人を信頼することを経験できなかった子は、後に信仰を持ちにくかったり、信仰から離れやすくなる傾向があります。そういう子に対しては、絶えず受け入れることによって、不信感が改善されていくことを目指しましょう。

・親は一貫した態度で接することが大切です。それによって子どもたちは、「してよいこと」と「してはいけないこと」を学びます。

・この年齢の子に接することは、仕事としてではなく、幼子を愛された主への奉仕と考えるべきです。子どもたちは、教会に対する最初でもっとも永続的な印象を持ちます。この年齢の子は何を教わっているのかはよくわからなくても、何かを感じています。奉仕者は、穏やかで優しく、落ち着いていることが大切です。女性だけでなく男性の奉仕者もいたほうがよいでしょう。

参考：最近の研究からわかってきたこと（『人が学ぶということ』より）

・乳児は歩いたり、言葉を話し始めるずっと以前から、自分を取り巻く世界について整合的に説明しようとして常に世界を観察し、考え、さまざまな事象における相関関係や統計的な分布についてのルールを抽出し、次に何が起こるのかについて予測をおこなっている。（p.22）

・生後まもない乳児（1歳未満）でも、特定の領域において人間の知識体系の根幹となる知識を持っていること、またそれらの知識を用いてかなり複雑な推論をすることができることが明らかに

なった。これらの知識を足がかりにして、乳幼児は非常に効率よく概念を学習していくのである。しかし、これらの知識が生得的な知識として人間の脳に組み込まれているのか、それとも脳の構造的制約、知覚システムの制約などの生理構造的制約のみを土台にして、環境からのインプットを受けることによって、そのような知識を学習した結果なのかについては、意見が分かれている。

(p.48、67)

- ・物体の永続性（ものは見えなくなっても消え去るわけではない）を理解している。
- ・数の表象：1、2、3、4くらいまでの数の小さい自然数を区別でき、数えたり、足したり、引いたりできる。
- ・物体の運動の基本原理（素朴力学理論）：物体はそれ自身では動かず、他の力によって動かされない限り、同じ場所に存在し続ける。物体は自分の視界から見えなくなってもその存在は消失しない。物体は別の物体を通り抜けない。物体は他の力を加えられない限り、自分自身でその形を変えることはない。一つの物体は全体がまとまって同時に動く。物体は運動の際、軌跡は連続的でありワープしない。物体は物質とは異なっていて、二つの物体がくっつけられても、二つが融合して一つの物体になることはない、など。(p.36、38)
- ・動物と非動物の運動法則の区別：動物は自ら動くことができるが、非動物は外から力が加わらない限り勝手に動きださない。
- ・乳児は生まれたときには、すべての言語で使われるすべての音素の違いを識別できる能力を持っている。そしておよそ生後8～12ヶ月の間に、母語では使われない音素の対比を区別することができなくなる。
- ・乳児は遅くとも生後9ヶ月の間までには、連続的なスピーチから単語を切り出すことができるようになる。(p.54)
- ・生後8ヶ月の乳児は音声の弁別や単語の切り出しに専念していて、意味には注意を向けていない。生後14～15ヶ月では、音声の分析と意味づけを両方おこなっているが、この二つの作業を同時にすることはむずかしい。生後18ヶ月頃になると両方の作業をうまく同時に行うことができるようになる。この頃、子どもの語彙数は爆発的に増え始める（語彙爆発の現象）。2歳の誕生日頃になると、平均して毎日6～8語くらい新しい言葉を覚えていく。(p.55)
- ・人間の子どもは、生まれたときから身の回りに存在している大人の自然な発話をインプットとして受けるだけで自分の母語における音声の特徴やレキシコンの構造の特徴を自然に分析して抽出することができる。インプットがあれば、自動的に分析学習装置が働いてしまうのである。そして何らかの規則性が見つかり、その規則性がその後の学習における制約として機能し、それを手がかりにしたトップダウンの学習が行われるのである。

1 歳児

身体的発達

最初はやちよち歩きですが、だんだんと自信をもって歩けるようになります。歩き始める時期が早いことが、重要ではありません。普通は生後12～15ヶ月で、身体的に準備ができた時に歩き始めます。

手先が器用になり、帽子や靴下を脱いだり、箱を開けたり、ボトルの栓を開けたり、穴に棒を入れたり、落書きしたり、本を1ページずつめくったり、4～5個のブロックで塔をつくったりできます。昼間に1度、2～3時間の昼寝をするだけでよくなります。夜は11～12時間寝ます。疲れやすいので、教会のプログラムでは休憩を入れるとよいでしょう。2歳に近づく頃、トイレトレーニングを始める親が多いですが、2歳より前にトレーニングを始める必要はありません。

知的発達

身体の成長と共に、知的にも成長します。特に言語が発達します。新しい言葉（おもに名詞と動詞）をどんどん覚え、2歳までに250～300語を覚えます。物の名を言えるようになります。単語をつなげて使ったり、簡単な文章をつくれるようになります。兄や姉のいる子は、言葉の覚えも早くなります。

おそらく一番よく使う言葉は「いや！」でしょう。自分の意思を伝えるために、使いやすい言葉です。大人は子どもの思いに反して、自分の意思を押しつけないようにしましょう。けれども、たとえ子どもたちの応答が「いや！」であっても、親や教会が期待していることを知ってもらう必要もあります。子どもたちの「いや！」という応答を減らすためには、「いや！」と答えるだろうと予想される質問をしないことです。

1歳児は、集中できる時間が短く、記憶も短いので、お話はとて短くすべきです。しかし、子どもたちは同じお話を繰り返して聞くことを好みます。指示も何度も繰り返しましょう。指示は、子どもたちが何をしたらよいのかわかるように、肯定的に伝えましょう。たとえば、「床の上に本を置かないでね」と言う代わりに、「本は机の上に置いてね」と指示したほうが、よく伝わります。

1歳中ごろから2歳にかけて、「客体としての自己」(objective self)ができてきて、自分を客観的に認識できるようになります。つまり、自分の行動や特徴を規準に照らすことによって自分自身について意識的に評価することができるようになります。

社会的発達

1歳児は「私」と「私のもの」の世界に住んでいます。「あなた」や「他の人」という概念はほとんど持っていません。ひとり遊びをします。他の子がしていることと同じことをしますが、いっしょにしたいわけではありません。この年齢の子たちの情緒的発達や神経の発達の制約によって、協力したり、分け合ったり、親切にすることは、むずかしいことです。十分な数のおもちゃや本を準備しておくといよいでしょう。

人を物と同じように扱おうとします。さわったり、押したり、操作しようとしています。その行動を大人はしばしば誤解します。子どもたちは「人」の概念をあまり持っていないので、そのようにするのは、問題がある時は、①2人の子を離します、②他の子も友達であることを伝えます、③友達にどうしてはいけないかを伝えます、④その子の注意を何か別のものに向けさせます。

情緒的発達

この時期の子どもは情緒が安定していません。よくなじんだ物事、部屋、人といる時に、安心

します。安心感を育てるには、単純さと秩序が重要です。教会のプログラムを考える場合は、部屋内の配置、プログラム、スタッフが同じであるとよいでしょう。スタッフには、乳幼児のスタッフに要求される資質と同じように、穏やかさ、安定性、優しさが求められます。

子どもたちは体と情緒の状態によって、状況の受け取り方が変わります。疲れていたり、空腹であったり、不安だとぐずりやすくなります。自分の感情を遊びの中で表すことがよくあります。どのように行動しているかを見て、子どもたちがどのような感情でいるかを理解しましょう。

霊的発達

霊的にはオープンで受け入れやすい時期です。まだ疑うことをしません。基本的な聖書の真理を受け入れることができるので、ただお世話をするだけではもったいないです。例えば、神が自分をつくられた、イエス様が自分を愛してくださっているなどを伝えましょう。単純な歌や、大きくて単純な絵を用いるとよいでしょう。概念を知的に理解するよりも、大人の態度や行為から体全体で学びます。神の愛を学ぶには、温かく幸せに感じる環境を用意する必要があります。天地創造を学ぶには、自分の周りの美しいもの・不思議なものを発見するとよいでしょう。教会を知るには、教会の自分の部屋やスタッフに親しみをもってもらえるようにします。また聖書にも親しみを持てるようにするとよいでしょう。

スタッフに必要なこと

- ・1歳児は元気にあふれています。スタッフには愛と忍耐が必要です。動き回れる空間を用意しましょう。子どもたちに探索する機会を与える必要があります。新しく覚えたことを繰り返し練習して、自分でできるようになっていきます。
- ・乳幼児や1歳児は、親が教会に連れてきています。親は自分の子どもをどれくらい大切にしてくれているかを絶えず見えています。教会は親への働きかけが重要になります。赤ちゃんが生まれた時は、親は神に心を開きやすくなっているので、親のクラスを持てるとよいでしょう。
- ・スタッフは、主への奉仕として、教会の最初で最も長く残る印象を子どもたちの内に形成することを助けています。穏やかで、優しく愛情のある人が適任です。夫婦で奉仕してもらうこともよいでしょう。子どもへの性的虐待の事件が起こっているため、おむつを替えたり、トイレに連れて行くのは特定の信頼できる人に限定してもよいでしょう。

2歳児

身体的発達

身長 88~90センチくらい、体重 12~13キロくらい。2時間くらいの昼寝が必要。夜は12時間くらい寝ます。すぐに疲れるので、活動と休息が交互に必要です。トイレのトレーニングは普通、この時期におこなわれます。夜の間におもらしする子もいます。自分で服を着始めます。2歳児にとって「アクション」がキーワードです。発達していく筋肉が動くことを要求するので、じっとしていることは苦手です。動き回れる空間と機会が大切です。

知的発達

スポンジのように多くのことを吸収します。探索が好きで、いろんなことを試してみても学びます。新しい言葉は直接的な経験（五感）と関係づけて覚えます。約 300 語を知っています。時間と空間は理解できません。記憶は不確かなので、繰り返しが必要です。注意は 3~4 分しか続きません。話をしながら絵本を見るのが好きです。本を読んでもらうことも好きです。同じ話をくりかえし聞くことを好みます。自分が聞いたことは何でも信じます。クレヨンを使うことができますが、線をなぞることはむずかしいです。大人に自分が描いたものをみてもらいたがります。音楽ではリズムにのって体を動かすことが好きです。短い歌を歌えます。

教える時は、抽象的概念や象徴を避けましょう。繰り返しが大切です。感覚を刺激するアクティビティが大切です。一度に一つの指示をしましょう。集団に対してではなく、個人的に教えられ、愛される必要があります。

社会的発達

1 歳児と同様、自己中心的です。一人遊びをします。他の子とうまく関係をつくれません。自分のおもちゃに固執します。共感や同情を示す行動が見られるようになります。家族とのつながりがとても強いです。普段は小人数の家庭の中にいることが多いので、大きなグループの中に入ると不安を覚えます。

情緒的発達

正しい選択がむずかしいので、目立ちたがったり、物を壊したり、何でもやりたがります。自分にできないことが多いため、「いや」、「できない」という否定的な答えが多くなります。スタッフは否定的な答えをさせないような質問の仕方を考えましょう。自由と適度の抑制と保護が必要です。

霊的発達

教えてくれる人の言うことを信頼します。自分の周りの不思議を神と関連させ始めます。神が自分を守ってくださる、イエスが自分の友達、イエスが神の子、聖書が神の言葉、といったことなどを学びます。神や聖書のことをたくさん知りたがりますが、自分で読むことはできないので、親やスタッフの助けが必要です。家庭や教会の霊的雰囲気を容易に感じ取ることができる。

3 歳児

身体的発達

身長 95~98 センチくらい、体重 14~15 キロくらい。三輪車に乗ったり、階段を昇ったり、上手に食べたりできます。夜の睡眠時間も短くなり、昼寝も必要でなくなる子もいます。おもしろもあまりしなくなります。小さい筋肉が徐々に発達し、ボタンのかけはずしができます。靴をはいたり、ぬいだりできますが、ひもを結ぶことはまだできません。筋肉の共同作業を促すおもちゃがあるとよいでしょう。

知的発達

子どもたちは五感を通して世界を理解しています。大人以上に肌触りや色、匂いに敏感です。空想的、真似をする遊びができます。400～600語を使えます。話すことが好きで、ある程度会話ができます。ほとんど黙っていません。自分が大人であるかのように、大人と会話することを好みます。自分の周りの世界に興味があります。理由づけ能力が発達します。何か分かる絵を描いたり、いくつか字を書いたりできます。話をつくるのが好きです。韻（ライム）や意味のない言葉をおもしろがります。絵具の筆も使えるようになります。みんなで歌うことができるようになります。

社会的発達

他の人といることが好きです。他の子と遊ぶことが容易になってきて、おもちゃを貸してあげることもできるようになります。大人を喜ばせようとして、手伝ってくれたりします。この年齢の子どもたちが生活する世界は、家庭や保育園が中心です。自分がもっともよく接する人々がすることをまねようとします。

情緒的発達

自立、自制に向かって成長していますが、多くの恐れもあります。その恐れは現実のものもあれば、想像上のももあります。奉仕者はすべて現実のものとして対処してあげて、子どもが安心できるようにしてあげましょう。

霊的発達

2～3歳児にとって一番大切なのは、周りにいる大人との関係です。温かく愛される環境で育つなら、神の愛などの霊的な事柄が理解しやすくなります。その反対に、冷たい環境で育つと、霊的な事柄が理解しにくくなります。

大人の態度と行動を観察して多くを学びます。たとえば、意味がわからなくてもお祈りを聞いて覚えます。聖書のお話をこまかく覚えたり、暗唱聖句や歌を覚えることもできるようになります。聖書の教えを活動と経験を通して教えることが大切です。子どもたちが尋ねる多くの質問にやさしく、誠実に答えてくれる大人が必要です。たとえば、天国はどこ、神様はどれくらい大きいのか、おばあちゃんはどこへ行ったのか、などの質問です。やさしく聖書的に答える必要があります。

2～3歳児が学べる聖書のテーマ

神は私を愛している。神は世界を造られた。神は私を造られた。神が造られた動植物から食べ物、着る物を得ている。神はいつも私と共にいてくださる。イエスは私を愛してくださる。イエスは救い主。イエスは神の子。神が私に家族をくださった。お父さんとお母さんは私を愛している。神は私が兄弟姉妹を愛することを望んでいらっしゃる。神は私が家族を助けることを望んでいらっしゃる。私は神と話すことができる。私は神を喜ばせることができる。私は神の言葉を聞くことができる。教会は神の家。教会は楽しい所。など

4～5 歳児

身体的発達

4歳で身長は102～103センチくらい、体重16～17キロくらい。5歳で身長110～111センチくらい、体重19～20キロくらい。4歳児は急速な成長期にあります。動き、走り、飛び跳ね、にぎやかです。急速に発達していく腕や足などの大きな筋肉が運動を必要としています。10分以上座っていることが苦痛です。大きく動き回れる空間のある部屋があるとよいでしょう。たえず動くので、4歳児は疲れやすく、混乱したりします。そのため、身体活動と静かな活動を交互に入れるとよいでしょう。指の筋肉などの小さい筋肉の発達は、大きい筋肉の発達よりも遅れますが、徐々にコントロールできるようになります。ジッパーの開け閉め、ボタンをしたり、切る作業を好みます。しかし、線の内側に色を塗るのは苦手です。

5歳になると身体的発達がゆるやかになります。相変わらず元気いっぱいです。ぽっちゃりした体形でなくなっていく。背が高くなり、手足も伸びます。4歳の時よりも、体全体の調和がとれた動きができるようになります。4歳児よりは落ち着きがありますが、体を動かすことが必要です。目と手の連携も発達します。女兒は男児よりも身体的に早く発達します。

5歳児は、音を正しくとれないことが多いですが、メロディーを口ずさむことができるようになります。組み立て式のおもちゃを好み、小さな物を扱うことができ、靴ひもを結べるようになります。しかし、まだ正確に切ったり、線の内側に色を塗ることはむずかしいです。

知的発達

4～5歳児は、好奇心旺盛で何でも知りたがりです。

4歳児はすべてのことについて理由が知りたくて、「どうして?」「どうやって?」と尋ねます。自分の考えを言葉にすることができるようになります。言葉遊びを好み、おかしなことを言って喜びます。現実と空想が混じっていることがあります。時間と空間の理解が限定されています。「きのう」と「きょう」はわかりますが、それを超えた時間は曖昧です。より長い時間集中できますが、容易に他のことに関心が移ります。字を読めるようになり、自分の名前を書けるようになります。

5歳児はさらに知的に成長します。「実際」と「ふりをすること」の違いがわかるようになり、「ごっこ遊び」ができるようになります。周囲の世界に好奇心があるので、何でも尋ねます。完全な文を使うことができます。因果関係を理解し始めます。テレビや大人の話す言葉をそのまま使うことがよくあります。5歳児は時間の感覚を持ち始めます。時計やいつ始まるかということに関心が出始めます。5歳児は、道具や教材を多様に使うことができるようになります。絵を描く時は、大切だと思う部分を大きく描きます。文字や数字への興味が高まります。

4～5歳から、はさみを使うことが上手になり、色塗りや形を見分けたり、形を使って遊ぶこともできます。5～7分の集中時間です。活動が長すぎると落ち着かなくなります。しかし、やっていることに興味があれば、注意は続きます。直接体験から、一番よく学ぶことができます。4～5歳児は、「私にやらせて!」とよく言いますので、できるだけやらせてあげましょう。まだ自分で

読んで学ぶことはできません。見て、聞いて、探索して学びます。4歳児で1200語、5歳児で1500～2000語を知っています。5歳児で自分に言われたことの約75%を理解できます。

いろいろな経験が必要で、発達していく言語能力を使う機会が必要です。選択して選ぶ機会も必要です。子どもに自分の興味あることを選ばせることはとてもよいことです。ほとんどの5歳児は、幼稚園や保育園で字を書くことを学びます。

社会的発達

4歳児は他の子どもと共に遊ぶことができるようになります。小さなグループを作って、他の子を入れないようにします。4歳児は、自らグループの中に入っていくことをためらって、招かれるまで待っていることがあります。友だちと分け合ったり、順番に使うことを学ぶ必要があります。関心の中心は自分ですから、ほとんどすべてのことを自分自身と結びつけて話します。

一般的に5歳児は、友だちと親しく遊んだり、話したり、分け合ったりします。手伝うことが好きです。自分たちの問題を大人の助けなしに解決できることもあります。他の人の感情や権利を尊重することを学びます。5歳児は一致を好みます。ひとりの子が何か言ったら、他の子はすぐに同意します。5歳児は、自分の尊敬する大人と同じようになりたがりです。けれども、5歳児はまだ自分を中心とした世界にいます。権威があるのは自分の両親です。子どもたちを叱るよりも、良い行動を積極的にほめるほうが効果があります。

幼稚園や保育園に行くことによって、自分の家族以外の人々の存在を知り、社会的ルールを知るよい機会になります。

情緒的発達

4歳児は感情を激しく表す時がありますが、すぐに次のことに移っていきます。5歳児は感情の爆発は少なくなり、問題を別の方法で解決できるようになります。4～5歳児は、特に「恐れ」の感情とつき合っていく必要があります。親や教師は、「恐れ」をしつけのために使ってはいけません。子どもたちは自分の周りにいる大人の感情と同じ感情を持つ傾向があります。子どもたちの知識を増すよりも、正しい態度・良い感情と価値観を身につけることを助けるほうがはるかに大切です。そのためにも、子どもたちの周りを、愛情があり安心できるクリスチャンで囲むことが、もっともすばらしい環境を備えることになります。

スタッフや親は、子どもたちが自分の強い感情を取り扱うことができるように助けましょう。ほほえみと前向きな態度で喜びを表すことが、子どもたちに大きく影響します。子どもたちは、決まった物事を繰り返したり、規則があると安心します。

霊的発達

4～5歳児は、神を個人的な方法で思い描きます。神の偉大さ、不思議、愛などを、自分の経験の枠内でわかる言葉にして理解します。具体的な実物を示すと効果的です。たとえば、「神様がこの世界を創造されました」と言葉で説明するよりも、木の葉、貝殻などを子どもたちに触れさせて、「神様がこれらの美しいものをお造りになり、私たちの世界のすべての物を造られました」と説明するほうがよく伝わります。

4～5歳児は、スタッフが話すイエスや神の言葉を受け入れることができます。そういう場合の

多くは、両親が積極的に霊的訓練にかかわっています。子どもは親に喜んでもらいたいし、神に愛してもらいたいと思っています。スタッフは子どもの決断がただ大人を喜ばせたいためだけではないことを注意深く判断する必要があります。

4～5歳児は、神に話しかけ、感謝を表し、必要を求めることを学ぶことができます。礼拝経験は特別なものです。神が造られた物や人・自分に感動や感謝を覚える時、短くても感謝の祈りをささげることは、すばらしい経験になります。

4～5歳児は正しいことと間違っていることの区別が付き始めます。間違っただけの行為は神の目には罪であることがわかるようになります。子どもたちはいつも神が愛してくださっていて、心から謝る時に赦してくださることの確信をもつことが大切です。社会的に発達してきているので、家の外の経験が重要です。教会学校に行くことを喜び、そこで習ったことを家庭でもしよとします。教えていること（愛、やさしさ、赦しなど）を生き方をもって示している大人が必要です。子どもはすぐに、言行の不一致を感じ取ります。

教えられる聖書の真理は、子どもたちの生活と必要に関わりのあるものでなければなりません。難しい教理ではなく、基本的な真理を伝えましょう。そのことが、子どもたちのニーズが満たされることにつながることを教えましょう。

4～5歳児は、言葉を文字通り受け取ります。「たとえ」や「象徴的用法」はわかりません。たとえば、「心をイエス様に明け渡す」、「人間をとる漁師」などの表現は避けましょう。

4～5歳児に聖書を教える場合、子どもたちが理解できるように助けましょう。聖書の言葉を暗記することはできますが、内容を理解できるように助けましょう。お話が好きで、5歳児は質問に答えたり、自分が聞いたお話について話すことが好きです。

現実と空想を区別できるようになり始めるので、聖書の事実性を強調するとよいでしょう。時間と空間の理解は限られているので、年代や地図のことは避けるとよいでしょう。

小学1～2年生

身体的発達

6歳で身長はおよそ116～117センチ、体重はおよそ21～22キロ。大きな筋肉は発達してきていますが、小さな筋肉はまだうまく整合していません。エネルギーにあふれ、全身で活動したい欲求があります。体を動かしたくて、じっとしていることが困難です。いつも体の一部を動かしていることもよくあります。他の子の妨げにならないように、大目に見てあげましょう。しかし、自制ができなくて活動し過ぎになることがあります。活動と静まる時を交互に持つ必要があります。小さい筋肉がうまく整合しないので、長時間の複雑なプロジェクトは好みません。途中で興味を失わないように工夫する必要があります。他の子どもと比較して、劣等感を持ったりするので、比較をしないように注意しましょう。

厳密にスケジュールどおりの活動をするよりも、さまざまな学びの経験が大切です。一つの活動は20分以内がよいでしょう。さまざまな学習活動（アクティビティ）を用いることによって、いろいろな子のニーズに応えることができます。

知的発達

注意深く観察します。どうやって物が動くのかを見たり、できあがったものよりもつくる過程に興味があります。物を分解しがりますが、もとに戻すことは簡単にはできません。言葉による理由づけが始まり、自己表現が発達します。語彙は急速に伸びます。

低学年の子はまだ抽象化や一般化はできません。大人は彼らのレベルでコミュニケーションをする必要があります。時間概念が発達し、過去と未来を関係づけられるようになりますが、今現在が中心です。

大人を喜ばせることが好きで、大人の期待に一生懸命応えようとします。その期待が大きすぎるとフラストレーションを覚えたり、失望します。よいセルフイメージ（自己像）の発達に重要な時期です。

言葉よりも、具体的・身体的経験を通してのほうが学びやすいです。ですから、五感を使う方法がよいでしょう。たとえば、教師から「神様の望まれることを選びましょう」と教えられるよりも、実際に選択をしなくてはならない立場に置かれたほうがよく学べます。聖書に書かれているお話が好きです。教える場合、現実と空想の区別がむずかしいので、聖書に実際に書かれていること以外の想像での話はあまり加えないほうがよいでしょう。また、象徴的な言葉や物を用いることも控えましょう。たとえば、黒色が罪を表し、赤色が十字架を表すなどということは、1～2年生は混乱します。教材としては、聖書の中のストーリーが適していて、パウロ書簡などはもっと大きくなってからがよいでしょう。子どもたちにわかるように伝えられて、子どもたちの生活と関連させることが大切です。

知的にも急速に発達します。集中できる時間は10～15分と短いので、長い説明を聞くことはむずかしいです。一度に一つのことをしましょう。空間的距離感がよくわかりません。また、自分の経験を超えたものは理解が困難です。たとえば、旧約時代の出来事と新約時代の出来事は、どちらも「はるか昔のこと」であって、区別することは困難です。

空想と現実の違いがわかるようになり始めます。しかし、テレビ番組の中の空想と現実の区別はつきません。基本的に大人がすることは正しいと信じているので、テレビの中で大人が間違ったことをしてもそれを正しいと誤ってしまいます。聖書の出来事は現実であることを、しっかりと教えましょう。

文字を上手に読める子もいれば、読めない子もいます。読む課題は少しにして、読まなくても明確にわかる視覚教材を用いるとよいでしょう。

社会的発達

依然として家族との人間関係が中心です。けれども、1年生は大きな変化を経験します。幼稚園や保育園から小学校に入学します。より広い世界に入ります。同年代の子たちからの承認と受容をさらに求めるようになります。グループから仲間はずれにされることを気にします。普通は新しい子とでもすぐに友達になれます。友達になる子はよく変わります。1年生の頃は男女がよく一緒に遊びますが、3年になると男女で違った興味が発達するのでほとんど同性としか遊ばなくなります。性差の多くは子どもたちがいる文化の期待によるものです。大人は子どもの遊びをあまりにもステレオタイプにしないように注意するとよいでしょう。つまり、男の子の遊びはこういうもの、女の子の遊びはこういうものと決めつけられないほうがよいでしょう。

グループでする作業をととても喜びます。その作業を通して、ほかのメンバーとどのように関わ
るかを学びます。権威を尊重したり、他人のニーズに気づいたりできるようになります。競争を
好みません。

情緒的発達

同年齢の子どもに共感します。お話の中の子どもを自分のことのように感じると、大変感動し
ます。やさしい同情があり、愛を具体的な方法で示そうとします。宣教や他の人々への関心を育
てるよい時期です。

まだ情緒のコントロールは不安定です。特に疲れた時は、そのままの感情を出すこともありま
す。ほとんどの時は、機嫌がよくてやかましいですが、家や学校でむずかしいことがあったりす
ると、自分の感情を出せないでいることもあります。自分を抑えすぎたり、攻撃的にならないで、
自分を表現できるように学ぶ必要があります。いつもと同じことをする安心感と、新しい経験を
してみたい気持ちとの間を揺れ動きます。

2年生はいろんなことを心配します。友だちから好かれたいのじゃないか、時間までに終わら
ないのじゃないか、新しい人と会った時どうしたらいいのだろうなど。安心させてあげることが
大切です。

2年生は、「消しゴム年代」と呼ばれることもあります。彼らは、大人や友達や自分自身から認
められなくて上手にやりたいのですが、実際にはなかなかうまくいきません。それでよく消しゴ
ムを使うことになるのです。やることに時間がかかっても待ってあげましょう。

霊的発達

聖書の概念を文字どおりに理解できます。両親やスタッフは日常生活でキリストのために生き
る生き方をすることによって、よいモデルを示すことができます。

正誤を区別でき、事実と空想の違いがわかるようになります。聖書はよく知っている毎日の経
験に適用される必要があります。問題のある家庭に育った子どもは神の愛がよくわからないこと
もあるので、配慮が必要です。

用語をわかりやすく、単純に説明しましょう。救われた子は救いの確信を明確にできるように
導きます。悔い改めの仕方も教えましょう。大人の指導と教えによって、子どもたちはキリスト
にあって成長でき、証しできます。

1~2年生は、イエスを救い主として受け入れる準備のできている子がたくさんいます。イエス
に関するばらばらの出来事を結びつけ始めます。そして、誕生から十字架、復活に至る一貫した
生涯を理解し始めます。学んだことは、ロールプレイや作品などによって表現することが大切で
す。表現活動によって、子どもたちは学んだことを実行に移しやすくなります。スタッフも子ど
もたちの表現活動を通して、子どもたちがどのように理解しているかがわかります。子どもたち
が罪深さや欲求不満を感じる時は、主の助けを経験するよい機会です。子どもたちの神理解は、
大人との関係と密接に関係しています。周りの大人とのよい関係が築けていれば、神を信頼しやす
くなります。

小学3~4年生

3~4年生は、小学生時代の間中にいます。3年生になれば、ある程度の発達が進んでいて、フラストレーションを感じるものが少なくなります。1~2年生の時に身につけた能力をいろんなことに広げていきます。

身体的発達

この時点では、男女は同程度の身体能力を持っています。しかしこの後、男の子は女の子よりも筋力がつき、特に大きな筋肉が発達していきます。女の子は、小さな筋肉の発達が目立つようになります。女の子のほうが、ピアノやバイオリンを早く始めることが可能です。

サッカーや野球などのスポーツを始めるのに適した年齢です。ルールを守ることをしっかり教えましょう。スポーツを通して、子どもたちは他の人といっしょにやっていくスキルを学べます。大人は子どもたちが勝利にこだわらないように導きましょう。また、過剰な期待をかけてはいけません。

知的発達

3年生は、文章を書いて自己表現できるようになります。多くのことを同時に覚えることができます。一度に多くの指示を聞いても、わかるようになります。順番に考えることができます。子どもたちは自分が学んでいることを言葉にして言えない場合は、実際には理解できていません。ですから、わかったかどうかを知るためには、言葉で説明してもらおうとよいでしょう。

低学年の子たちに比べて、時間の概念もよくわかるようになってきます。ほとんどの子が、「現在」を中心に生きています。「今」「ここ」における経験を感じ、行動しています。自発的で衝動的で予測不可能です。過去に起こったことの学びも大切ですが、子どもたちの現在の状況に適用する必要があります。

3~4年生は短い話を読んで、質問に答えることができようになります。覚えることも簡単です。暗証聖句も容易にできますが、内容を理解しているかどうか確かめることが必要です。子どもたちが日常使っている言葉で、聖句を言い換えるようにするといいでしょう。

ピアジェによれば具体的操作期です。分類、系列、対称、1対1対応、1対多対応などが徐々に理解できるようになります。しかし、実際の物事に適用する能力はまだ限定されています。

順序を逆に考えることができるようになります。たとえば、 $2+1=3$ で、 $3-1=2$ がわかるようになります。また音楽では音階を順に上げていって、逆に下がってくるすることができます。

社会的発達

8歳以前は、子どもたちは性別に関係なくいっしょに遊びます。しかし、8歳くらいになると、同性と遊ぶことが増えます。子どもたちは同じクラスや近所の同性の子と親しい友達関係を築きます。いっしょに活動する機会があると、親しくなります。グループ内で問題が起こっても、自分たちで解決しようとし、自分たちでグループのルールを決めて、そのルールを守ることができるようになります。

相変わらず家族が一番影響力を持っています。母親の重要性が低下し、父親の重要性が増してきます。子どもたちは自分自身を家族の中で独立した者として見ることができ始めます。家族か

ら離れることができるようになります。

大人の権威を無条件に認めます。10歳くらいまでは、ルールは大人が決めて、守るべきものとして考えます。リーダーを認めて、リーダーから好かれたがります。モデリングと同一化によって、リーダーを真似るようになり、モラルや良心の発達につながります。教会でもリーダーがよい模範を示すことが大切です。聖書の中のヒーローたちの話も好まれます。イエスこそが本当のヒーローであることを教えましょう。

情緒的発達

3~4年生は、自分では何でもできていると思っています。自尊心が高く、いろいろなことをやってみようとしています。いろいろやってみることによって、自分のユニークさがわかるようになっていきます。大人にとって、子どもたちの違いを受け入れることが大切です。3年生はユーモアの感覚が発達し始めます。話をよく聞いてあげて、いっしょに笑うことはすばらしいことです。

子どもたちは、深く感じるがあっても、その感情をどのように扱ってよいのかわかりません。それで爆発してしまうことがあります。こういった爆発的な感情を健全な方法で表すことができるように助けましょう。感情を抑えつけたり、がまんすることだけを教えると、感情を表せなくなり、情緒的に健全な発達がむずかしくなります。子どもたちの語彙が急速に増加する時期なので、攻撃的な行動ではなく言葉で表現することを勧めましょう。自分の感じたことをいっぱい話したがるので、じっくり聞いてあげましょう。

子どもたちは、恐れ、怒り、混乱、痛み、罪悪感などといったむずかしい感情を経験します。こういった感情は、人生で必ず経験するものであることを伝えましょう。恐れの中の感情のほとんどは、親に話すことによって解消します。もし恐れによって日常生活に支障をきたすようなことがある場合は、専門家に助けてもらいましょう。大人の情緒的病気は、子ども時代の恐れと関係していることがよくあるので、子どもの時にきちんと対処しておくことが大切です。

多くの子は、9歳までに罪悪感を感じるようになります。一般的には罪悪感はよくない感情として考えられることが多いですが、実際は私たちを神様へと導いてくれるものです。大人は子どもたちに悔い改めと神様の赦しを説明し、導くことが大切です。

子どもたちは新しい状況に置かれると混乱しがちです。引越し、離婚、再婚などは大きな混乱をもたらしますので、時間をかけて子どもたちが落ち着くのを助けましょう。

子どもたちの関心をもつ世界が広がっていきます。貧困や飢餓、病気などで苦しんでいる世界の子どもたちを助けることに関わることも大切です。

3~4年の子どもたちにとって、もっとも大切な感情はグループへの所属感です。スポーツクラブなどに参加する子も増えます。子どもたちが神の家族である教会の一員であるという感覚を持てるように助けましょう。そのために、いろんな活動をいっしょにしましょう。共に神を礼拝することもすばらしいことです。

霊的発達

3~4年生は、自分が生きている世界を造られた神に関心があり、個人的に親しい関係を築くことができます。祈りは神に語りかけるだけでなく、神から聞くことでもあることを教えましょう。自分の知っていることから類推するので、神が永遠に存在される方であることを理解するのが困

難です。神が悪い人も愛することを理解することもむずかしいでしょう。死に関心があります。聖書からの真理を伝えましょう。

この年齢の子どもたちは、白黒はっきりさせたがります。灰色の領域は理解がむずかしいです。ですから、すべてのことに真実である必要があります。罪悪感や赦しがわかってくるにつれて、この傾向は変化します。アニメやゲームの影響を受けて、神を危険な状況から助けてくれる「よい霊」であり、サタンを問題を起こす「悪い霊」と考える誤りに気をつけましょう。個人的に話ができる時を持ちましょう。あなたが子どもたちを大切に思っていることを、アイコンタクトや肩をたたくことなどによって示しましょう。

小学5～6年生

身体的発達

エネルギーにあふれています。とても活動的で、疲れを知らないように見えます。健康で外で遊ぶことが好きです。成長速度はゆるやかになりますが、大きな筋肉と小さな筋肉がうまく整合できるようになります。高学年の後期には女子は男子より精神的な発達が速くなります。

知的発達

子どもたちは、鋭く、批評的で、教えがいがあります。彼らの質問は論理的で考えさせられます。権威に疑問を投げかけることもあります。時間、空間、数の概念が急速に発達します。世界観を持ち、地理や歴史を学ぶことができるようになります。年表や地図を用いることができます。神様は歴史を通して働かれること、世界中で働いておられることを学べます。

抽象的概念の理解が徐々にできるようになります。ただし、十分に説明することが大切です。論理能力も発達し、比較、対照、体系化、分類、順序だてができるようになっていきます。集中力も伸びます。

記憶の黄金期です。興味さえあれば、速く、容易に覚えます。期待されすぎたり、課題が大きすぎると感じると学習への否定的な態度が形成されます。競争をさせる場合は、あまり得意でない子を配慮しましょう。そうしないと、セルフイメージ（自己像）を傷つけ、発達全体に支障を与えることにもなりかねません。最もよい動機づけは、競争や報酬ではなく、神に喜ばれること、本人の満足、成長、達成感です。

社会的発達

同年代の子どもといっしょにいたがり、強い影響を受けます。独立したがります。仲間の受容を切望し、大人からの承認の要求は減少します。競争を好みますが、動機づけとしての限定的競争にとどめるとよいでしょう。

情緒的発達

低学年の子たちに比べて、恐れることが少なくなります。勇敢であることを示したがります。ジョークやユーモアが好きです。責任感が育ちます。正しく教えられれば、情緒をコントロール

できるようになります。情緒的に安定している教師が必要です。一貫して愛とサポートを与えましょう。

霊的発達

適切に導かれていれば、救われます。適切な指導があれば、単純な帰納法的聖研ができます。善悪を区別できるようになります。自分にとってのヒーローに従う傾向があります。尊敬する大人には、忠誠心を持ち、よく学びます。信じる決心をした子は、個人ディボーションや奉仕ができるように導きましょう。神が一人ひとりの人生に計画を持っておられることを教えましょう。

第2章 子どもと環境

遺伝と環境（文化）

子どもたちが生まれてから死ぬまでの生涯に、大きな影響を与えるものは、遺伝と環境です。遺伝子は神による人間の設計図といえます。ただし、車や家の設計図とちがって、人間の設計図はどんな環境にも適応できるように、大きな柔軟性をもっています。遺伝子に含まれているさまざまな可能性は、環境（文化）と触れ合うことで発現していきます。文化とは、ある社会的集団の中で、態度、信念、習慣、価値、役割、期待などが学ばれ、一つの世代やグループから他の世代やグループに引き継がれていくものです。社会化の過程を通して、子どもたちは特定の文化の態度と価値を身につけていきます。家庭や学校をとおして、特定の文化が要求する行動と価値が引き継がれていきます。

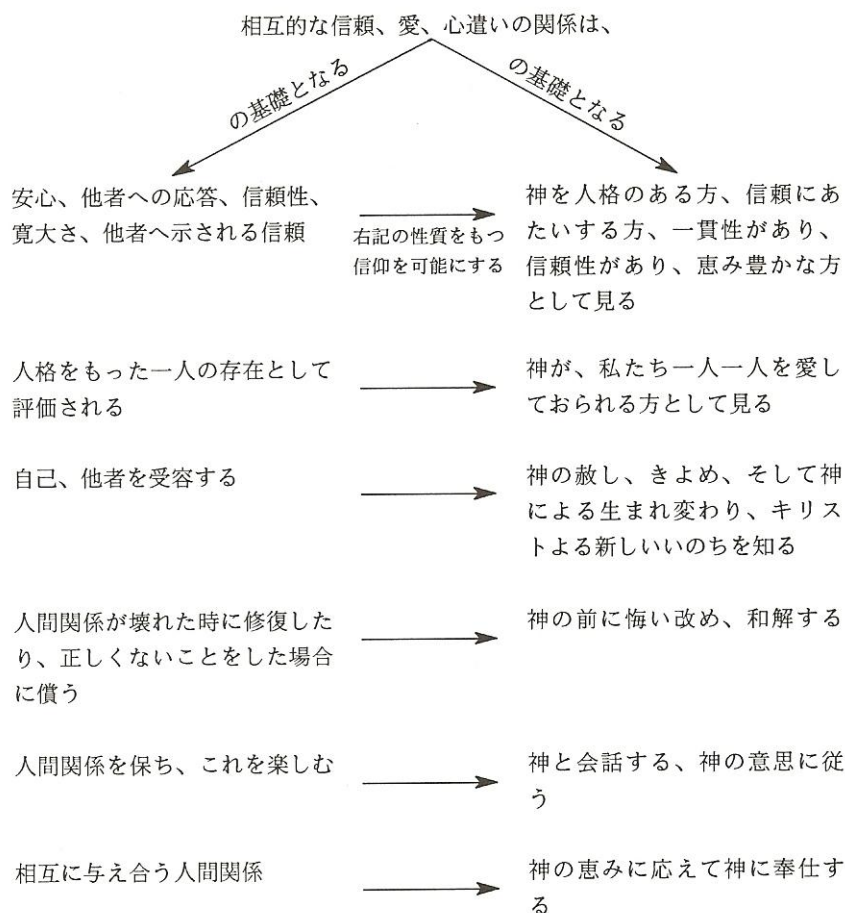
遺伝と環境は共に、個性の発達を助けます。子育ては、子どもたちを特定の文化に適応できるように育てる「子どもの社会化」といえます。子どもたちの基本的な傾向は、家庭と文化によって形成されます。

経験と信仰の関係

・子どもたちは無条件で愛されること、受け入れられることが重要です。そのことが人と神とを信頼する土台になります。

「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。」 1ヨハネ 3:18-19

経験と信仰の関係



(ブリッジャー『子どもが神に出会うとき』 p.46)

家庭の役割

(家庭について、さらに詳しくは『ファミリーミニストリー』をご覧ください。)

- ・生物的に、家庭は家族を守り、関心を持ち、世話をし、養います。
- ・教育的に、家庭は、人生を教える場です。家庭において、私たちはいろいろな世代の人と互いに学び合い、文化的価値を次の世代に継承します。家庭において、子どもたちは身体的スキル、文化的価値、習慣、言語、家事、社会的に適切な行動基準を身につけます。
- ・宗教的に、すべての信念が教えられます。
- ・経済的に、家族のメンバーが分担して、必要な物事を供給します。
- ・社会的に、温かい相互サポートと交わりが健康な成長に必要です。
- ・余暇の過ごし方として、家族はお祝い、スポーツ、旅行、遊びを共にします。
- ・愛情的に、子どもたちは家族だけが与えることのできる愛情のきずなを必要としています。こういった愛なしには、子どもたちは情緒的に欠乏します。夫婦、親子、兄弟姉妹、親戚や友人との愛は、幸せになくなくてはならないものです。
- ・子どもにとって神が最初に備えてくださった教育者は親です。ですから、教会が第一にすべきことは、両親が積極的に子育てできるように支援することです。しかし、親が積極的に子育てに

関わらない場合は、教会が親に代わるものを提供することを考える必要があります。「私の父、私の母が、私を見捨てるときは、主が私を取り上げてくださる。」(詩篇 27:10)。

・神は親に日常生活のあらゆる機会を用いて、子どもが神を愛するように教えることを期待されています。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。これをするしとしてあなたの手結びつけ、記章として額の上に置きなさい。これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。」(申命記 6:4-9)

・パウロは家庭内で、子どもが明確な教えを受け続けることを勧めています。「私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。」(2テモテ 1:5)。「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」(2テモテ 3:14-15)。

・子どもはクリスチャンの親によって聖別されています。信仰をもった親の言葉や模範によって、子どもは大きな影響を受けます。「なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。」(1コリント 7:14)

・親が子どもを正すことを怠ると、反抗的になったり、信仰を持たなくなる危険性があります。「エリは非常に年をとっていた。彼は自分の息子たちがイスラエル全体に行っていることの一部始終、それに彼らが会見の天幕の入口で仕えている女たちと寝ているということを聞いた。それでエリは息子たちに言った。『なぜ、おまえたちはこんなことをするのだ。私はこの民全部から、おまえたちのした悪いことについて聞いている。子たちよ。そういうことをしてはいけない。私が主の民の言いふらしているのを聞くそのうわさは良いものではない。人がもし、ほかの人に対して罪を犯すと、神がその仲裁をしてくくださる。だが、人が主に対して罪を犯したら、だれが、その者のために仲裁に立とうか。』しかし、彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。彼らを殺すことが主のみこころであったからである。」(1サムエル 2:22-25)

・親やスタッフが神に従う模範を示す必要があります。幼い子どもにとって、親や先生は全能のように感じています。親やスタッフが神に従う時、神は究極の権威を持っておられるとわかります。

・聖書から、子どもの教育に親が重要な役割をもっていることがわかります。

「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。『あなたの父と母を敬え。』これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、『そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする』という約束です。父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。」エペソ 6:1-4

「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。」コロサイ

3:20-21

- ・父親は子どもたちを霊的に導く責任を与えられています。「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい」(エペソ 6:4)。「また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました」(1テサロニケ 2:11-12)。
- ・子どもたちの神の概念は、父親によってつくられる傾向があります。

教会の役割

- ・教会は「神の家族」です。クリスチヤンの関係を結びつけるものは、血縁ではなく信仰です。「しかし、イエスはそう言っている人に答えて言われた。『わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟たちとはだれですか。』それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」(マタイ 12:48-50)

教会は互いに関心を持ち、分かち合い、祈り合う「神の家族」であるべきです。このことが、真正なクリスチヤン信仰の最大の魅力です。私たちは孤立する者ではなく、交わる者として造られています。教会がこのように温かでサポートする環境を提供できなければ、子どもたちをうまく養育することはできません。

- ・子どもたちは教会で学ばない限り、本当の神のことを知りません。普通の日本の環境では、子どもたちが教会以外の場所で、神や聖書のことを学ぶ機会はありません。世俗化が進むにつれて、教会での学びの貴重性はますます高まっています。
- ・人生初期の経験は、その後の生涯の価値観を形成します。子どもたちを温かく受け入れることで、子どもたちの内に生涯にわたって神や人を信頼する思いが形成されます。一貫した聖書的価値観を教えられることによって、生涯にわたる安定した価値観が形成されていきます。このように、子どもたちへのミニストリーは、その子の一生に関わる大切なものとして考えなければなりません。誕生から 10±2 歳の間、神様と自分の周りにいるクリスチヤンから温かく愛されていると感じられる環境で育つと、イエスによる救いを受け入れやすくなります。
- ・子どもたちは、発達的に理解する必要があります。子どもたちは体だけでなく、知的、社会的、情緒的、霊的にも成長していきます。一人ひとりのペースに合わせて、次のステップへ成長していく助けを提供することが大切です。教会の環境は、子どもたちの成長に最適です。教会では、多様な人との関わりが多く、愛情を受け、一つの家庭よりも大きな社会的環境を提供します。そのため、教会で育つ子どもたちは、家庭だけにとどまっている子どもたちよりも、学校生活に上手に適応することができます。

子どもの性質

- ・子どもたちはいつの時代もどの地域でも変わらない性質を持っています。子どもたちは良いことも悪いことも何でも吸収します。罪を犯します。愛と赦しが必要です。

・子どもたちは神からの贈り物です。神が子どもたちに計画しておられることが成就するように、私たちは助けます。

・子どもたちは神にオープンです。子どもたちは神の存在を証明するように議論しません。幼い子どもたちは、霊的経験ができます。誕生から8歳くらいまでは、子どもたちは現実と空想の区別が苦手です。この時期の子どもたちは、しっかりした大人の信仰に触れることが大切です。

・罪の赦しが必要であると認めることができるのは、なんらかの道徳的理解ができていることを示しています。スタッフは、公平さと一貫したしつけによって正義を教えます。おとなしく従っている時だけ、愛するのではなく、しつける時にも愛していることを示します。

・子どもたちが抽象的な概念がわかるようになるのは、よく似た具体例に出会うことです。

・神が人間に自然な成長・発達の過程を与えられました。子どもたちは人を信頼することを通して神を信じるようになっていきます。

・神は子どもが、成長していくように創造されています。遺伝によってすべて決定されるのではなく、育つ環境の影響、特に両親や教育の影響を大きく受ける可能性を与えられました。

社会的発達を促すために

・子どもは誕生直後から、アタッチメント（愛着）を形成します。アタッチメントによって、子どもは他者への信頼が形成されます。このアタッチメントが、後の人間関係に影響します。ほとんど自動的に身につけた価値は、子どもの人格を形成していきます。生涯の初期に最も身近に接した環境が、その子の生涯に最も大きな影響を与えます。

・十分な愛を受けずに育つと、情緒的、知的、人格的に問題をかかえ、攻撃的になったり、無気力になったりしがちです。単に衣食住が満たされるだけでなく、愛情を十分受けることによって、適切な自尊心が育ち、自分に価値があることがわかります。

自分を愛することと、他者を愛することは相互に排他的なものではありません。イエスはマタイ 22:37-39で『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。』とおっしゃいました。愛には他者に対する深い関心が含まれています。

・多くの子どもたちが、自己中心から集団を意識し、集団に貢献することの意識へ移り変わることに苦労します。「僕が」と言っていた子どもたちが、「僕たち」と言い始めます。小さい子どもたちは、一人で遊びます。人気のあるおもちゃやお菓子、注意を引くことで争いになります。短時間でもグループ活動を取り入れるとよいでしょう。

自分の周りの子どもたちへの意識が高まるにつれて、他の人に影響を与える行動に責任を持つようになります。

・聖書の教えをどのように他の人との関係に適用するかを教えます。

・スタッフが模範を示します。

・順番にする練習を与えます。公平さを学びます。

・共同作業をほめます。みんなで協力したことをほめることによって、そういった行動が繰り返されるようにします。

- ・個人の能力が全体の益に貢献できることを学べるように助けます。子どもたちが自分の能力だけでなく、他の人の能力をも感謝できるようにします。
- ・交わりの機会を提供します。温かく受け入れられる環境で、他の子どもたちといっしょに遊んだり、活動できる機会を与えます。民主的な方法と自分の責任を受け入れることを学ぶことが大切です。
- ・奉仕を通して社会的意識を発達させます。
- ・男女間の競争をあおらないようにします。小学校の中学年になると男女間の対立意識が芽生えてきます。男女の違いを超えて、尊重し、協力することを学べるようにします。

現代の文化の影響

- ・子どもたちの忍耐力がなくなっています。エンターテインメント文化の中で育っているので、いつも楽しい事を与えられ、楽しいことだけを選んで過ごすことが普通になっています。そのため、興味がないことはすぐに飽きます。新しいことに取り組もうとしません。
- ・子どもたちの経験することが、大変限られたものになってきています。多くの子どもたちは勉強していれば親が満足しているので、学校と塾だけという非常に限られた経験しかしていません。

家庭の問題

離婚・再婚の増加に伴い、安定した家庭環境で育つ機会が減少しています。

仲の悪い両親

絶えず衝突している両親は、子どもたちに悪い影響を与えます。そういった家庭の子どもたちには、社会的能力や学力が劣る傾向が見られます。スタッフは、温かく受け入れる関係を作り、子どもの思いを聞いてあげましょう。注意深く見守り、励まし、ほめてあげることが大切です。

別居中の両親

子どもは両親の間で何が起きているのか、その原因は何なのかわからずに不安です。片親がいなくなった悲しみがいえるには、少なくとも1年かかります。子どもは将来のことが不安です。自分ではコントロールできない状況に置かれています。スタッフは、片親がいなくなることはどれほど大変なことかを共感してあげる必要があります。子どもが悪いのではないことを確認してあげましょう。

離婚した両親

親が離婚した子どもは、多くの場合、原因が自分にあったと思って自分を責める傾向があります。「もっとよい子にしていたら、親は離婚しなかった」などと考えます。離婚は子どもの人生に最大の影響を与える出来事です。離婚によって子どもの世界は、全く変わります。片親をなくし、その親の側の親戚との関係がなくなります。場合によっては、住み慣れた家や学校、親しかった友達とも別れなければなりません。子どもは、ショックを受け、不信、悲しみ、孤独、怒りを感じ

じます。恥ずかしくて隠しておきたいと思います。今後のことが不安です。小さい子は、怒りを表したり、どちらの親につくのかということで混乱します。落ち込んだり、友達の輪に入ろうとしなかったりします。この時期、スタッフは子どもによく目をかけて、いつでも話を聞き、子どもの友達になってあげることが大切です。しかし、スタッフがなくなった親の代わりになることはできません。離婚したばかりの親は、傷つきやすく不安定なので、対応に配慮が必要です。

虐待

- ・年々、虐待される子どもが増加しています。多くは報告されないままです。

- ・虐待とは、子どもを傷つける行為です。適切なケアや監督をされないネグレクト、情緒的、身体的、性的虐待などがあります。見知らぬ人に虐待される場合もありますが、多くの場合は、家族や知り合いから受けます。虐待者は、被害者を脅したり、物をあげたり、同意の上であると装って、自分の罪を秘密にしておこうとしがちです。虐待傾向のある人が、子どもと接触できる仕事につきたがることもあります。

- ・教会ができること

子どもたちに、どういうことが虐待であって、どうやって報告するかを教育します。スタッフは虐待のサインの見分け方を知り、虐待に気づいた場合、誰に報告するかを知っている必要があります。教会内での虐待を防ぐようにし、疑わしい報告がされた場合にどうやって対処するかを考えておく必要があります。ポルノや暴力的なゲームや映画などに気をつけることも大切です。

- ・スタッフが子どもたちと信頼関係を築きます。子どもが小さくて、親などの親しい人から虐待を受けている場合、スタッフだけが信頼できる大人ということがありえます。スタッフは子どもが恐れなくて教会学校に来られるように、普段から信頼関係を築くことが大切です。

- ・子どもたちに、よい接触とよくない接触の違いを教えます。そしてよくない接触があった場合はどうすべきかを教えましょう。どこに電話をかけるかを教えます。

- ・スタッフの心得

1. 子どもと1対1になる状況を避けましょう。
2. 見知らぬ大人を子どもたちに近づけないようにしましょう。
3. クラスのドアはガラス張りにするか、ドアを開け放して中が見えるようにします。
4. スタッフに任命する場合は、人物をよく確かめましょう。

- ・サインを知る

1. 説明のない傷。さまざまな治りかけの複数の傷、内出血、やけど、みみずばれ。性的虐待の場合は、歩いたり座ったりする時に不快感を示したり、トイレで痛みを覚えたり、繰り返しのどが化膿したり、下着に血がついていることがあります。特に小さい子どもをトイレに連れて行く人は、こういったサインをよく知っている必要があります。

2. 行動の変化。虐待を受けた子は、人形や動物と遊ぶ時、過剰に暴力的になる傾向があります。幼い行動に戻ったり、おねしょをするなどの退行現象も見られることがあります。性的に虐待された子どもは、特定の個人や場所に恐れを表します。あるいは、年不相応の性的知識や用語、不適切な行動をすることもあります。誰からもらったかわからないプレゼントやお金を持っていることもあります。家族が虐待している場合は、子どもの社会的接触を制限しようとします。その

ため、虐待を受けている子どもは、友だちから孤立しがちです。

3. ネグレクト。不適切な服装や清潔でない服装をしていることがあります。栄養不足でお腹をすかせていることもあります。休息不足で、クラス中に眠ってしまうこともあります。家にいたくないので、CSに最初に来て最後に帰ることもあります。

- ・虐待が疑われる場合は、信頼できる専門機関へ連絡し、アドバイスを受けましょう。

薬物中毒

かつては、大人の問題と考えられていた薬物中毒は、徐々に低年齢化してきて、今では小学生でも無関係ではなくなってきました。友達との関係で、タバコ、アルコール、ドラッグなどを始めることがあります。親が中毒だと、子どもが中毒になる可能性は4～5倍高くなります。年齢が低いほど、中毒症状が速く進みます。

- ・予防教育

中毒の危険性を教えます。これは中学に入る前の時期に必要です。もし子どもが異様な行動をしたり、めまい、涙目、眠気、口の渇きなどの症状を頻繁に訴えた場合、何らかの中毒の可能性ががあります。

子どもたちの外見が変わったり、つき合う友達が変わることがあります。勉強やスポーツをしなくなることもあります。孤立し、秘密を抱えた雰囲気になります。

- ・子どもたちに中毒の兆候が見えたら、大人は直ちに介入する必要があります。秘密にしておこうとする大人は、問題を深刻化させます。
- ・親が協力できそうな場合は、親に伝えます。
- ・親が子どもの中毒に関与している場合は、虐待として取り扱われます。法的な機関に連絡をとります。
- ・子どもが自分を大切に思う気持ちが高ければ、中毒に陥る危険は減ります。

ストレス

おそらく子どもにとってのストレスの最大の原因は、家庭問題でしょう。親を亡くしたり、親が離婚することは、子どもにとって大変大きなストレスになります。引越し、弟や妹の誕生、親の再婚、虐待する親、アルコール中毒の親、過密なスケジュール、地域環境や学校環境もストレスの原因になりえます。親は子どもの成長を願って、塾や習い事やスポーツ教室に通わせています。それに抵抗なく合わせられる子もいますが、中には燃え尽きてしまう子もいます。多くの問題を抱えた子どもたちが、助けを受けていません。

- ・子どもがストレスを受けていることをどうやって知るか

子どもと個人的に話します。子どもの家庭生活の様子を聞きます。親子関係、兄弟関係、普段の生活のことなど。子どものしぐさ、表現、気分などに注意を払います。幼い子どもの気分はよく変わりますが、問題を抱えた子どもは周期的に悲しくなったり、怒ったりします。失敗を恐れて活動に参加しない子は、セルフイメージの問題を抱えている場合があります。親からほめられたことのない子もいます。そういう子は文章を書く時に書き直しが多く、自信を持って何かをす

ることができません。また、過剰に攻撃的であったり、かたくなな子は、自分の不安を攻撃や怒り、支配することで表していることがあります。

・ストレスを受けている子をどうやって助けるか。

セルフイメージの低い子を励ましましょう。誰もがミスをすることを教えましょう。スタッフは自分の失敗を認めて、それを笑うことができるとよいでしょう。天の父なる神様は、子どもたちをありのまま愛していただくことを思い出させましょう。

・教室の緊張をほぐします。よいしつけができる人は、リラックスした雰囲気の中で、ルールを守らせることができます。レッスンのプランを達成するために、急いではいけません。余裕を持って柔軟に導きましょう。

・年齢に応じた行動基準を定めます。

・いつも事実を尋ねたり、一つの正解があるような質問をすることは避けます。失敗を恐れる子どもは、そういった質問に答えががりません。主観的に自由に答えられる質問をしましょう。

・競争は制限しましょう。一般に競争は一人の勝者とその他多くの敗者を生み出します。子どもたちは勝つことが好きですが、負けた時はさんざんな状態になります。特に、自分がすでに敗者であると思いつている子どもにとっては、競争はよい影響がありません。

・子ども同士の結果を比較してはいけません。比較すると、子どもたちの積極性がなくなり、人と競争することが求められていると感じてしまいます。子どもたちがしたどんな努力でも、ほめましょう。

・教師は子どもたちとの時間を取り、友達になりましょう。必要な場合は、専門家の助けを求めましょう。

死

友達や家族を亡くした子どもに、どうやって接したらよいのでしょうか。多くの子どもたちは、祖父母と一緒に暮らしていないので、家族の死を経験することはめったにありません。子どもたちがよく知っている死は、テレビやゲームの中のもので、実際の死に対しては心の準備はできていません。できるなら、両親やスタッフは、誰かの死が近づいたら、亡くなる前に、子どもたちに死について話しましょう。肉体の死と、信仰者の永遠の命について説明しましょう。

・悲しみの過程 以下の順序はすべての人に当てはまりますが、長さは人によって異なります。

1. ショック：無感覚、弱さ、頭痛、など

2. 混乱：怒り、罪意識、恐れ、神様と取引する、泣く、パニック、死者の記憶や死の状況にひたる、食欲不振、睡眠障害、神経質

3. 希望：前向きの考えが始まる

4. 受容：適応、再建、仕事の再開、人との交わりの回復

・サポートする人は、それぞれの段階で示される感情を受け入れる必要があります。話すよりも聞くことが大切です。「あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのない」（1テサロニケ 4:13）ように、主にある希望にしっかりと立ちましょう。悲しみは回復への一歩です。

・死の現実を受け入れられるように助けます。

・悲しみを表しやすいようにしましょう。

- ・亡くなった人の思い出をやさしく語り合うことも有意義です。
- ・食事と睡眠、運動、社会生活などを規則正しく続けられるように助けます。
- ・悲しむことの拒否、怒りの継続、身体的症状、引きこもりなどに注意しましょう。
- ・必要な場合は、専門家の助けを求めましょう。

第3章 子どもと聖書・神様

子どもに関する聖書の教え

・神の人類に対する計画には、いつも子どもが含まれています。聖書に登場する最初の家族であるアダムとエバは、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。・・・」（創世記 1:28）という命令を神からいただきました。

・神は子どもたちをケアし養育していくための指針として、私たちに聖書を与えてくださっています。

・子どもは成長課程にある者として書かれています。教える必要があります。

「来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。主を恐れることを教えよう。」詩篇 34:11

「望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。しかし、殺す気を起こしてはならない。」箴言 19:18

「愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る。」箴言 22:15

「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。」1コリント 13:11

「兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。」1コリント 14:20

「それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたそざれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」エペソ 4:14-15

「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっていきます。まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」ヘブル 5:12-14

・イエスご自身が赤ちゃんとして地上に誕生し、成長の過程を通られました。

「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人にと愛された。」ルカ 2:52

・イエスの弟子たちが子どもたちを近づけないようにした時、イエスは子どもたちが自分の所へ来ることを許可しました（マタイ 19:14、マルコ 10:14、ルカ 18:16）。マタイ 18:1-10で、イエスは子どもたちが神の国で特別な立場が与えられていることを教えています。小さい子どものように素直に神を信じることによって、神の国に入ることができます。子どものように単純に信頼することが求められています。子どもたちは、神の国の生き方の大切な面を示してくれています。子どもたちを受け入れることは、イエスご自身を受け入れることです（マタイ 18:5、マルコ 9:37、ルカ 9:48）。神は子どもたちがひとりとして滅びることを願っておられません（マタイ 18:14）。子どもたちをつまずかせることは、多くの他の罪よりも重いものです（マタイ 18:6-14、マルコ 9:42、ルカ 17:2）。

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。」マタイ 18:3

「また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。」マタイ 18:5-6

・イエスは忙しい働きの中でも、子どものために時間をとられました。

「そして、その子どもの手を取って、『タリタ、クミ』と言われた。(訳して言えば、『少女よ。あなたに言う。起きなさい』という意味である。)すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに包まれた。」マルコ 5:41-42

「イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。『口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。』するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、「この子は死んでしまった」と言った。しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。」マルコ 9:25-27

何歳から自分の罪に対して責任があるのか

人は生まれながらに原罪を持っているため、その罪に対して責任を持っていると考えられます。私たちは、神の前に自分の行いを説明する責任があります。「こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」(ローマ 14:12)。

子どもたちは何歳から、自分の罪に対して責任があるのでしょうか？それは聖書には書かれていません。神は人間の発達課程を用いられ、聖霊は子どもの年齢に応じて働かれると考えられます。神は人の心の内のことを正しく理解されるので、何歳以上でなければ罪の悔い改めができないと人間が決めてしまうことは問題です。

神学的には大きく二つの立場があります。一つの立場は、原罪のために、子どもは生まれながらに滅びの中にあり、生涯のどこかで罪を悔い改め、イエスを救い主として受け入れて救われる必要があると考えます。もう一つの立場は、子どもが神の家族の中に生まれる場合、救いの契約の中に入れられている印として幼児洗礼を受け、自発的に信仰告白できる年になって堅信礼を受けて正式な教会の会員になると考えます。

子どもはある日突然、罪の責任を負えるようになるわけではありません。子どもはそれぞれ、大人になって完全に責任を負えるようになるまで、徐々に責任能力が発達していきます。子どもの成長段階に従って、責任能力を考える必要があります。思春期前の子どもは、大人と同じようには罪について理解できません。神のご性質から考えて、理解も実行もできない事柄について、責任を問うことはなされないと考えられます。真に罪が理解できるようになり、意識してキリストを拒むようになるまで、神の愛、憐れみ、正義、イエス・キリストの贖いのみわざによって覆われていると考えることができます。私たちは、故意に、意識的に、継続的に神を拒絶する段階に達した時、罪の性質を十分に備えた者として、神の前に完全に責任のある存在となります。

クリスチャンホームの子どもは、神の契約における約束を拒絶するまで、神の御国の一員とみなすべきです。ですから、そのような子どもに対しては、伝道するというよりも、信仰の育成をするという考え方をしたほうが適切です。聖書の中では、信仰者である両親の信仰が、その家族

全体の信仰であると理解されています。その信仰が傘をさしているように家族全体を覆います。両親の信仰を通して、家族全員が神様との契約関係にあるとみなされます。契約の関係は信仰ではなく、恵みに基づいたものです。ですから、生後 8 日目の子どもが契約の中に入れられるのです（創世記 17:12）。

流産した子や中絶された子の場合、知的障がいをもっていて自発的に罪の悔い改めや信仰告白ができない子の場合、どうなるのでしょうか？神のご性質から考えて、これらの子どもたちの場合は救われていると考える人がたくさんいます。

子どもの救いのためにできること

- ・生まれた時から、聖書を教えます。それが、適切な土台になります。「また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」 2テモテ 3:15

- ・私たちは神の絶対主権を認めます。信仰は神の言葉を聞くことから始まります（ローマ 10:17）。人間が聖霊の業を妨げることがあってはなりません。

- ・人に対してではなく神に対して、自分の行い・考えを説明する責任があることを教えましょう。すべての権威の源は神にあります。子どもが幼い時は、両親が神から権威を委託されて守り育てます。親が神の意思に逆らうような場合は、神の権威に従うべきです。「人に従うより、神に従うべきです。」 使徒 5:29 後半

- ・子どもの年齢に応じて、理解できるように説明しましょう。

- ・具体的な例を用いて説明しましょう。たとえば、友達を赦したことなど。

- ・子どもたちが自由に質問できるようにします。

- ・子どもの理解を確かめるには、スタッフが語ったことを子どもにもう一度語ってもらうとよいでしょう。子どもが決まりきった言葉で答える場合は、その意味の説明を求めましょう。たとえば、「イエス様が自分の罪のために十字架にかかってくださった」と子どもが話した場合、「それはあなたにとってどういう意味があるの」と尋ねるとよいでしょう。

- ・福音の提示例 ①神様の愛、②罪の説明、③イエスの十字架、④イエスを救い主・人生の主として受け入れるように招く

- ・教える人は、大切な聖句をよく理解して子どもたちに説明できるようにします。聖句例：ヨハネ 1:12、3:16、3:36、ローマ 3:23、5:6、6:23、1 コリント 15:3、1 ヨハネ 4:8、4:14、詩篇 119:11

- ・決心を強制してはいけません。子どもは教師を喜ばせたかったり、友達と同じことをしたくて、決心の手を挙げることがあります。子どもに手を挙げて決心を示してもらう前に、心の内で「イエス様を救い主として受け入れるなら、まず心の中で『イエス様、私の救い主となって下さい』と言いましょ。」と勧めます。また、決断は個人的にできるようにしましょう。「友だちが決心したから、あなたもどう？」というような、集団圧力をかけることは避けましょう。また、プレゼントで決心を促すことも避けましょう。

- ・全体の場で決心者を募った場合は、その後に 1 対 1 で確認し、祈る時が必要です。

- ・子どもたちが決心した後、すぐにフォローアップを始めます。

- ・子どもの救いは、家庭と教会から切り離されて考えるべきではありません。子どもの救いのた

め、救われた後の霊的成長のため、家庭と教会は協力して奉仕していく責任があります。

神の概念の形成

子どもたちが有する神の概念は、どうやって形成されるのでしょうか？

- ・自分の親のイメージが大きく影響します。親がやさしいか、厳しいか、無関心かなどによって、子どもの内に形成される神のイメージが変わってきます。
- ・教会での教えが神の概念形成に影響します。教会学校や礼拝での神に関する教えによって、神のイメージが変わってきます。
- ・教会学校スタッフや牧師の態度や姿勢が、子どもたちの神概念の形成に影響を与えます。
- ・他の人の影響を受けます。家族や友人、マスメディアなどの神理解が影響を与えます。たとえば、災害を神の裁きと解釈したり、悪い事を天罰と解釈することを聞くと、それが神のイメージ形成に影響を与えます。

間違った概念

子どもたちはどうして間違った概念を持つのでしょうか？

- ・生得的に誤概念を持っています。
- ・罪の影響と人間的な制限があります。
- ・誤った知識や解釈を得ることがあります。
- ・誤った知識や解釈を正す機会がない場合があります。
- ・年齢的な制約があります。たとえば、幼い子は抽象的な概念を理解できません。

どうしたらよいのでしょうか？

- ・年齢にふさわしい教え方をします。たとえば、幼い子に抽象的な言葉や象徴的概念を使わないようにします。
- ・伝える側が、わかりやすく説明できるように準備しましょう。
- ・一度に一つの概念を伝えるようにします。
- ・言葉と経験が結びつくようにします。できるだけ具体例をあげましょう。
- ・正しいかどうか不明なことを教えません。
- ・子どもたちがどのように理解しているかを確認しながら進めましょう。

祈り

- ・子どもたちは、祈りは静かにしなければならない退屈なものと考えてしまったり、大人の祈りしか神は聞いてくれないと考えてしまうことがあります。また逆に、神は気前よく何でもくださるサンタクロースのような存在ととらえてしまう場合もあります。
- ・いつでも祈ってよいことを教えましょう。暗記した主の祈りだけを祈っているような場合は、子どもたちと神との本当のコミュニケーションの発達を妨げることにもなりかねません。信頼できる親子の会話のような祈りを教えていきましょう。

- ・神をほめたたえ、感謝しましょう。祈りは何かを求めるだけのものではないことを教えましょう。
 - ・子どもたちは忙しい親や大人に自分の話を聞いてもらうことがむずかしいことを経験しています。ですから、神がいつでも自分の祈りを聞いてくださることを理解しにくくなっています。スタッフは、子どもたちの話を注意深く聞き、答えるようにしましょう。そして、たとえ誰も話を聞いてくれなくても、神はいつも聞いてくださることを教えましょう。
 - ・神への命令や取引はしないように教えましょう。
 - ・個人的に罪を告白することを助けましょう。
 - ・神のみ心に従うことを教えましょう。祈りに関してもっともむずかしいことは、祈りの答えとして神がくださるものを受け入れることです。神はいつも祈りに答えてくださいますが、その答えは必ずしも自分が望んだものではないことを知ることが大切です。
- 親は子どもがほしがるものは何でも与えることをしないように、神も何でも祈ったとおりにしてくださるわけではありません。また、親がその理由をいつも説明するとは限らないように、神もご自分の答えの理由をいつも明らかにされるとは限りません。
- ・神の答えはさまざまな方法で与えられることを教えます。たとえば、聖書を通して、具体的な出来事を通して、親を通して、良心を通してなど。神は一人ひとりをよくご存知なので、各々に特別な方法で語りかけてくださいます。

第4章 子どもの学び

子どもの学びの特徴

- ・子どもたちは、経験と行動から学びます。大きくなるにつれて、言語の重要性が増していきませんが、経験と行動はずっと重要です。
- ・子どもたちは、モデルによって学びます。子どもたちは、親、友達、先生などを観察することによって学びます。子どもたちは、どんな行動がほめられ、どんな行動が罰せられるかを見ています。いろんな行動を試してみて、最終的に特定の行動を自分のものとしていきます。
- ・子どもたちは繰り返しによって学びます。小さい子どもたちは、同じことを何度も何度も繰り返すことを好みます。子どもたちが成長するにつれて、別の可能性を見たり、考えたりして、新しいことに挑戦するようになります。
- ・子どもたちは、具体的な言葉と経験から学びます。子どもたちは、抽象的には考えません。子どもたちが「正しい」答えをしても、概念を正しく理解しているとは限りません。子どもたちの理解度に応じて、使う言葉を考える必要があります。たとえば、「人をとる漁師」という言葉は、「ほかの人にイエス様のことを話す人」というように説明するとわかりやすくなります。
- ・子どもは孤立しては学びません。子どもたちは、多くの場合、仲間や大人といっしょにいることによって学びます。

教育目標

- ・最終目標：子どもたちがイエス・キリストを救い主として受け入れ、クリスチャンとしての価値観を身につけて正しい決定と行いができ、イエス・キリストに似た者へと変えられていくこと。
- ・下位目標
- ・教会に関わる家庭が、神が望まれるような子育てができるように助ける。
- ・教会全体が「神の家族」としての意識を高め、大きな家族となれるようにする。
- ・子どもたちが自分で正しい決断と行動ができるように、聖書の学びを提供する。
- ・子どもたちの発達レベルに合わせた学びを提供する。

聖書的方法 (「方法」に関しては別のテキストで詳しく説明します。)

1. 生活に関連させたレッスン

- ・子どもたちを学習過程に積極的に参加させ、学んだことを日常生活に関連させるようにします。「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。」申命記 6:6-7

2. 早い時期からの教育

- 「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」箴言 22:6

3. 発達に応じた訓練

・内容と方法は、子どもたちの理解レベルに応じたものであるべきです。

「私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」 1 コリント 3:2

子どもの礼拝

・受身ではなく積極的に参加できるものにしましょう。

・年齢にふさわしいものにします。子どもたちが理解できる言葉や内容にします。どうしても専門用語を使わなくてはならない場合は、子どもたちが理解できるように説明します。例：新生、義認、摂理など

・教師がよいモデルを示しましょう。み言葉を実践した例話など。

・礼拝の計画を考える時に、子どもたちも参加できるようにするとよいでしょう。聖書箇所を選んだり、賛美を選んで練習したり、お祈りに入れる内容を共に考えます。

プログラム

・レッスンテーマに導くアクティビティから始めます。

・アクティビティとそれにかかる時間を書き出します。

・それぞれのアクティビティの目的を書き出し、評価します。「いつもこのようにしている」というのは有用な評価基準ではありません。

・目的に貢献しないアクティビティをやめます。あまり貢献しないアクティビティの時間を短縮します。

・残ったアクティビティを、もっともふさわしい順序に並べ替えます。自然に流れるように工夫します。

・大きいグループにふさわしいもの、小さいグループにふさわしいものを決めます。たとえば、礼拝は大きいグループでよいかもしれませんが、聖書の学びの時間は小さいグループがよいかもしれません。

・子どもたちが集中できる時間に気をつけます。それはおよそ年齢と同じだけの分です。たとえば、10歳の子なら10分です。子どもたちが積極的に参加できるアクティビティに多くの時間を用いるようにします。

保育科クラスの例 (参考：『創造的な聖書の教え方』 p.286-96)

1. 開始前～クラスが始まって15～20分

部屋の各所に設置されたラーニングセンターで提供されるいろいろな活動に自由に参加できるようにします。子どもたちの興味をとらえ続けるようなアクティビティを提供します。例：砂遊び

①教授目標に関係するアクティビティだけを用意します。例：「イエス様は私たちに食べ物をくださる」活動：積み木で農場をつくる。ままごと。雑誌から食べ物の写真を切り抜いて、紙皿には

る。

②各ラーニングセンターに一人の教師あるいは補助者を配置します。子どもたちは自分から学びの目的にそった活動を始めるわけではありません。スタッフが適切な導きを与える必要があります。たとえば、ままごとの場合、イエスが食べ物をくださること、食べ物を育ててくださること、両親が働いてお金をもらう力を与えてくださっていることなどの説明を加え、イエスに感謝できるように導きます。スタッフは子どもと個人的に話すことによって、クラスで扱っている聖書の真理が絶えず反復されて子どもたちの内に浸透していきます。

③子どもに一つのラーニングセンターから別のラーニングセンターに移動する自由を与えます。

どのラーニングセンターに行っても統一された目標があるので、問題はありません。

④別のラーニングセンターが見えないようにします。それは、子どもたちの注意が散漫になって、頻繁にラーニングセンターを変えることがないようにするためです。そのために、稼動式の仕切りを用いるとよいでしょう。

2. 聖書物語の時間

1つのグループになって、聖書のお話を聞きます。10分以内がよいでしょう。2～3歳児にとって興味と注意を保持しておくことは容易なことではありません。視覚教材などで子どもの興味を引くとよいでしょう。この時間も楽しいものにして、聖書に対する興味を育てることが大切です。

3. 関係した学習活動（30～40分）

教えられた真理の復習になる活動をおこないます。

- ・歌：その日のクラスに関係ある歌（振りつけ付きもよい）。歌は大変有効です。学んで帰って繰り返し歌います。保育科で歌を歌う場合、2～3歳児は楽器よりも人の声に合わせる方が容易なので、楽器の伴奏はなくてよいでしょう。

- ・工作：①その日にならった聖書のお話を工作にします。たとえば、印刷してあるものを切り抜き、色を塗ります。②教わった真理に対して応答する工作を選びましょう。工作は時間内に仕上げ、どのような意味があるか、あるいはどのように使うかを説明します。

- ・その日のクラスと関係あるものを外へ出て見つけるアクティビティもよいでしょう。

幼稚科クラスの例（参考：『創造的な聖書の教え方』p.304-315）

1. 聖書の物語（8～12分）

視覚教材を用います。物語を聞き、話し合います。

2. リラックスするアクティビティ（5分）

例：巨大な象がノアの箱船に入っていくまね。イエスが触れてくださった瞬間にいやされて飛び跳ねる少女を演じる。

3. 礼拝の活動（20～25分）

- ・聖書の真理を自分の生活と関係づけるためのものです。

- ・賛美：特に重要です。目標に合うものを選びましょう。子どもたちが理解できる歌詞で、子どもたちが経験できることを語り、繰り返し歌う価値のある賛美にします。必ず意味を説明します。

- ・暗唱聖句：言葉それ自体よりもその意味に焦点を合わせる必要があります。聖句は子どもたちの日常の経験や活動と関係づけましょう。

・祈り：決して子どもたちに強いてさせないようにしましょう。賛美や聖句、話し合いから自然に生まれてくる祈りがよいでしょう。

・話し合い

4. 表現（15分）

クラスの応答目標を教会学校で実際に行ないます。聖書物語を演じたり、聖書の真理が適用される生活状況を演じたりします。工作は真理が自分の生活にどのように適用するかを理解するように計画します。工作の時は5、6人の子どもに対して1人の大人が必要です。スタッフは子どもたちとの会話を通して工作の意味と使用方法を教えます。

・よい幼稚科のお話の例（『創造的な聖書の教え方』p.301-302）

世代を超えたプログラム

教会の多くのプログラムが家族を結びつけるよりも、バラバラにしているという不満を聞くことがあります。会堂に入ると、家族は世代ごとに分かれてしまい、いっしょになることはほとんどありません。

現代の普通の家庭で育つ子どもたちは、祖父母などの高齢者と接する機会がありません。しかし、日本全体では、急速に高齢化が進んでおり、高齢者が増えています。子どもたちが高齢者との接し方を学び、自分自身の加齢の過程を学ぶために、教会は何ができるのでしょうか。

子どもと高齢者の交流は、両者共に益になります。ほとんどの高齢者は、子どもたちとの交流を喜び、子どもたちを教えたり、いっしょに遊ぶことができます。子どもたちは、愛情や教育を受け、親切にする機会を与えられます。信仰の成長には、他の人に仕えることが必要です。

・子どもたちの活動に高齢者を招く。

・スタッフに高齢者にも入ってもらう。

・子どもたちが高齢者の家庭の簡単な手伝いに行く。

・高齢者と手紙や写真のやり取りをする。

・すべての世代が関わるプログラムも可能です。たとえば、いくつかの家族がいっしょになり、親が交代で教えることができます。そうすることによって、親は家庭で使える教え方を学ぶことができます。すべての世代の人々が興味を持って、積極的に学びに参加できるトピックを探しましょう。

評価

・プログラムは魅力的ですか。

・子どもたちはアクティビティに興味を持っていますか。

・スタッフは子どもたちとよい関係を築いていますか。神の愛と受容を示していますか。

・カリキュラムは聖書に基づいていますか。子どもたちに焦点が当てられていますか。

・スタッフ：訓練、サポート体制はありますか、継続する人が多いですか、止めていく人の理由は何でしょうか。

・子どもの数に対するスタッフ数は適切でしょうか。

- ・プログラムはバランスが取れていますか。たとえば、礼拝、交わり、教え、表現
- ・伝道になっているでしょうか。
- ・欠席者にはフォローアップがなされていますか。
- ・牧師や教会全体の理解と協力が得られていますか。
- ・過去 10 年間の出席者数を調べましょう。
- ・初めて来た子は何人くらいいますか。初めて来たきっかけは何でしょうか。
- ・続けて来た子は何人くらいいますか。続けて来る理由は何でしょうか。
- ・どの時点で来なくなっているか。その理由は何か。
- ・信仰決心はいつ、どのようにして起こってきましたか。その後のフォローアップはどのようになされてきましたか。それは適切でしたか。
- ・教室の数や広さは充分でしょうか。快適に過ごせる照明、空調でしょうか。

競争

・多くの子どもたちは競争が好きです。しかし、子どもたちは競争をうまく取り扱えるほど成熟していません。勝った賞品を見せびらかしたい誘惑にかられたり、負けた失望で泣き出したり、怒ったりしがちです。教師は、競争をどう用いたらよいのでしょうか。

・競争は少数の勝者と多数の敗者を生みます。負けたいと思う子どもはいません。幼い子どもたちほど、セルフイメージが傷つきます。

・競争は学びのモチベーションとして正しく用いられる必要があります。以下の質問を考えてください。

①その競争は、教育的な目的がありますか？単に出席者をふやすためのものではありませんか？聖書の教えと調和する目的を持っていますか？

②その競争の目的は、時間とお金と労力に値しますか？

③競争から生じる興奮は、最終目的をぼかす結果になりませんか？

④賞品や賞は、参加を励ますほどに数が多いでしょうか？高価でなく、しかし、価値あるものでしょうか？

⑤子どもたちは賞品の中毒にならないでしょうか？より大きな賞をもらうように教えていないでしょうか？

・敗者を減らす工夫には以下のようなものがあります。

①自分自身の記録に挑戦させます。

②勝者のいろいろなカテゴリーを作ります。一番速い、強い、賢いという能力だけでなく、親切、助け合いなどのカテゴリーも考えましょう。

③すべての生徒がなんらかの賞を得られるように工夫します。

④個人対決ではなく、グループ対決にします。そうすれば、グループ内での協力や人間関係能力が伸ばされます。

叱り方

- ・子どもを叱る必要がある時は、個人的に叱りましょう。子どもをみんなの前で叱ると、全員が子どもの側になってしまう危険性があります。
- ・子どもに自分のやったことを話させましょう。教師が原因を見落としていることもあります。二人の子どもが関わっている場合には、二人から事情を聞きましょう。
- ・年度の最初に、みんなで合意した規則をはっきりさせておきます。必要な場合は、そのつど話し合っ規則を決めましょう。なぜ、その行為がいけないのかをはっきりさせます。規則は必要最低限にしましょう。こまごまと律法主義的にならないようにします。誰にもわかるように、壁にはっておいてもよいでしょう。
- ・行いを悔い改めたら、クラスに再び加わります。同じことが繰り返されるようなら、子どもの親と話し合ひましょう。
- ・間違った行動の結果の責任をとらせます。たとえば、汚した場合はそうじをさせます。けんかをした場合には相手に謝ります。
- ・一人のスタッフの手におえない場合は、複数のスタッフで事に当たります。必要であれば、家庭環境に問題がないかも調べましょう。ADHD など、専門家の診断が必要な場合もあります。

音楽

- ・歌詞は子どもにわかるものを選びます。
- ・歌詞は神学的に正しいものを選びます。
- ・その日の主題に関連する曲を選びます。
- ・メロディーは複雑すぎないものを選びます。
- ・幼い子どもたちは、正しい音やリズムがとれません。
- ・教師は、アクティビティを変える時やいろいろな合図として音楽を用いることができます。
- ・いろんな楽器を用いましょう。
- ・異文化の曲や楽器を用いてみましょう。
- ・子どもたちやスタッフがオリジナル賛美を作ってみましょう。

遊び

- ・遊びは子どもにとってなくてはならないものです。遊びは、学びであり表現でありレクリエーションです。遊びを通して、人や物との関係を学びます。社会的ルールも学びます。たとえば、自分の番を待つこと、公正に遊ぶこと、ルールを守ること、負けてもへそをまげないことなど。
- ・子どもたちに遊びの機会と道具と場所を提供しましょう。
- ・ごっこ遊びはロール・プレイの一種であって、聖書の教えを日常生活に適用しやすくすることができます。

おもちゃ

- ・おもちゃの選択基準
 - ・創造的に遊べるもの
 - ・スキルを発達させることができるもの
 - ・年齢に合ったもの
 - ・安全なもの：間違って飲み込んだ時、のどにつまるような小さなものは避けます。鋭い角、毒性のあるペイント、万一壊れた箇所から液体が出てこないもの、動く時に手などをはさまないもの。
 - ・長期間使えそうなもの。一時的にだけ人気のあるようなものは避けます。
 - ・競争や攻撃性よりも、協力することを促進するもの
- ・子どもが自分で出し入れできる低い棚を用意する。
- ・おもちゃの例
 - ・0~1 歳：ガラガラ、ベッドに取り付けるモビール、割れない鏡、オルゴール、やわらかいブロック、握るボール、握るおもちゃなど
 - ・2~3 歳：小さい滑り台、押したり引いたり乗ったりできる物、ボール、種類別に分けられる物、ミニカー、人形、ブロック、ままごとセットなど
 - ・4~5 歳：三輪車、楽器、ブロック、ミニカー、小さい人形や動物、パズル、服、ままごとセットなど
 - ・1~2 年生：ままごとセット、パズル、建物、道具、磁石、虫メガネ、ボードゲーム、町並みセット、指人形など
 - ・3~6 年生：ボードゲーム、カードゲーム、双眼鏡、コンピューター、クラフト、絵を描く用品、工作用品、グローブ、レコーダー、コンパス、パズルなど

食べ物

- ・食べ物は、子どもたちが互いに分かち合い、神に感謝をささげることが学ぶことができます。ナプキンや皿を配ったり、クッキーを数えたり、あとかたづけなども、子どもたちに自信を与えます。食べ物を配る役割を与えられた子は、自分が大切な貢献をできることを学びます。
- ・食事の用意をすることによって、子どもたちは心から神に食べ物の感謝を表すことができるようになります。
- ・料理も子どもたちが大変喜ぶ活動です。子どもたちは、触り、味わい、匂いをかげるレッスンがとても好きです。料理を通して、段取りを考え、レシピを読み、重さを量り、時間を計り、チームで協力するといったさまざまな能力を伸ばすことができます。
- ・小さい子どもたちにとっては、大きな筋肉や小さい筋肉の発達を促し、手と目の協働の練習になります。
- ・自分たちの努力が目に見える形で現れます。さらに、食べる喜びがあります。
- ・異文化経験の機会にも使えます。外国のお菓子や料理を作って食べてみましょう。
- ・子どもたちの誕生日に、その子が好きなものを作るのも楽しいでしょう。
- ・多くの子どもたちが、野菜や果物がどのように栽培されるのかわかりません。本物の家畜も知

りません。スタッフは、食べ物がどこから来ているかを教えるとよいでしょう。たとえば、野菜の中にある種によって次の野菜ができることが、神の方法であることを知ると、多くの子どもたちは驚きます。ただし、子どもたちの中には、家畜を殺して肉にしていることを知って動転する子がいるかもしれないので、配慮しましょう。

- ・小さな野菜やハーブなどを育てることも、よい学習経験になります。
- ・子どもたちが食物アレルギーがあるかどうかを親に確かめておきましょう。
- ・危険な調理器具、熱などに注意しましょう。
- ・食中毒が起こらないように細心の注意を払いましょう。
- ・できるだけよく見えるように、透明のプラスチック容器を用いるとよいでしょう。
- ・子どもたちの服が汚れないように、エプロンなどを用意しましょう。
- ・手順にそって、一度に一つの指示を明確にします。
- ・できるだけほめて励ますようにしましょう。
- ・スタッフだけの活動にならないように、子どもの年齢で可能なことをしましょう。
- ・子どもたちが自分でできることはスタッフが手を出さないようにしましょう。
- ・活動例：
 - ・生クリームからバターをつくる。
 - ・作ったものを親や友達にプレゼントする。
 - ・果物をしぼってジュースをつくる。
 - ・ポップコーン

図書

- ・最初に図書の目的を明確にしましょう。スタッフだけが利用するのか。子ども向けの本として、キリスト教書だけを置くのか、良書なら信仰書以外も置くのか。
- ・図書は子どもにも大人にも、大きな益をもたらしてくれます。調べ物、レッスンの準備、ディボーションの助け、息抜きの読み物など。
- ・スペースと予算を考えます。
- ・新刊書や良書の紹介をするとよいでしょう。

記念日、祝日

記念日や祝日は、学習のよい機会を与えてくれます。教会がどの日を用いることができるかを、よく検討しましょう。

- ・元旦：神様がくださった新しい年を感謝しましょう
- ・ヴァレンタインデー：神様の愛と信者の交わり
- ・イースター：イエス様の復活のお祝い
- ・母の日、父の日：両親に対する聖書の教え
- ・子どもの日：子どもたちの存在を感謝し喜びましょう。
- ・クリスマス：イエス様の誕生のお祝い

世界宣教

- ・帰国中の宣教師から、宣教師が遣わされている国について語ってもらいましょう。
- ・宣教師とメールのやりとりをしたり、インターネットを使って会話をすることも可能です。
- ・宣教師や宣教団体へ献金を集めて送りましょう。
- ・外国の人に、その国について語ってもらいましょう。適切な人がいない場合は、視聴覚教材を用いてもよいでしょう。その国の服、食べ物、音楽、会話、遊びなどを紹介して理解を深めましょう。その国の宗教状況を理解し、祈りの課題をみんなで祈りましょう。
- ・地球儀を置いたり、壁に世界地図を貼りましょう。宣教師が遣わされている国に色を塗ったり、宣教師の写真を貼るのもよいでしょう。

保育室（ナーサリー）

・保育室は、単に子守の場所ではありません。この場所で、子どもたちの神様や教会に対する最初の印象がつくられます。

- ・理想的には、幼児と2～3歳児は別々の部屋で別のカリキュラムがあるとよいでしょう。
- ・幼児はできれば、以下のように3つの部屋に分けられるとよいでしょう。

誕生～8ヶ月。ベッドに寝ている。

8～14ヶ月。這い這いする。

15～24ヶ月。よちよち歩き。

・危険な家具類をすべて撤去します。棚やキャビネットなどは、子どもたちの方へ開かないようにします。鏡やガラスがある場合は、飛散防止フィルムをはるとよいでしょう。子どもたちは床の上を動くので、柔らかくて、そうじしやすいカーペットを敷きます。這い這いしている子どもの上に、よちよち歩きの子が倒れ掛からないように注意します。洗面所があるとよいでしょう。トイレトレーニング中の子どものために、子ども用のトイレがあると便利です。遊び道具は、普段は収納スペースにかたづけおき、必要な場合だけ出せるようにします。

発達段階にふさわしい本とおもちゃを用意します。おもちゃは安全で洗えるものにします。子どもが自分でかたづけできるように、低い棚やカゴを用意しましょう。おもちゃは誤って飲み込んだ場合、のどにつまらないようにするために、小さすぎるものは避けます。

子どもたちの目線で自分が子どもになったつもりで安全を考えましょう。床に近いほど、気温は低くなります。電気のコンセントはいたずらできないようになっていませんか。電気コードは子どもがひっぱれないようになっていませんか。子どもがかじりそうな留め金などはないでしょうか。家具の角は安全でしょうか。子どもの小さい指がはさまるような箇所はないでしょうか。子どもが押すと動いてしまう家具はありませんか。ドアやブランコなどが安全に動く余地を確保していますか。赤ちゃんのベッドには、窒息する可能性のある枕や寝具はありませんか。子どもたちの手が届く所に、危険なものを置いてはいけませんか。

・子ども4人に対して1人のスタッフが必要です。スタッフになるには、厳しいチェックが必要です。トレーニングも大切です。スタッフはハイヒールをはいていませんか。ヒールは子どもに

大変危険です。危険性のあるアクセサリをつけていませんか。敏感な子どもに影響のある香水や化粧品を使っていますか。応急処置と緊急連絡先を知っている必要があります。

- ・ 幼い子どもは、世界を食べ物と食べ物でないものとの二つに分類します。何でも口に入れるので、注意しましょう。

- ・ 子どもたちが来る前に、必ず床を掃除機で掃除しましょう。

- ・ 清潔には気をつけます。おむつ交換をしたら必ず手を洗います。お菓子を配る前には、必ず手を洗います。他の子にうつさないために、病気の子どもは預からないようにします。

- ・ 終了後に、手すり、おもちゃをきれいにし、寝具で洗えるものは洗います。ゴミ箱を空にします。

- ・ セキュリティー

幼い子どもたちを、虐待者から守らねばなりません。

- ・ 外に通じるドアがある場合は、内側からカギをかけます。

- ・ 預けた親に正しく子どもをお返しできるようなシステムを作ります。

- ・ たとえ子どもが寝ていても、決して子どもだけにしてはなりません。子どもの虐待を防ぐためには、できれば大人が二人で見るとようにします。

- ・ 緊急の場合に連絡できるように、必ず親の電話番号をひかえます。

第5章 特別な必要のある子どもたち

すべての子どもたちが、聖書の基準に基づいて教育を受ける必要があります。すべての子どもたちが、愛され、受け入れられ、キリストを救い主として受け入れ、チャレンジを受け、霊的に成長し、必要とされ、貢献できる機会が与えられる必要があります。

子どもたちの中には、健康、身体、聴覚、視覚、言語、学習、行動、情緒に障がいを持った人がいます。全体の1割以上の子どもたちが障がいを持っています。障がいの種類と程度に応じて、教育内容や方法を考える必要があります。一人一人の制限を正しく理解しましょう。

特別な必要のある子どもたちと接する大人は、この子どもたちには特別な目的と使命があることを理解しなければなりません。神は私たち一人一人を特別に造ってくださいました。「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。(詩篇 139:13-16)。

また、神はさまざまな障がいを支配しておられます。「主は彼に仰せられた。『だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりののか。それはこのわたし、主ではないか。』」(出エジプト 4:11)。

できることを伸ばしてあげて、劣等感がなくなるようにしましょう。神が下さっている自尊心(セルフエスティーム)を正しく持てるように助けましょう。一人一人の賜物が教会全体のために用いられるようにしましょう。

クラスに溶け込めるように助けます。かわいそうに見てはいけません。忍耐を持ち、祈りをもって、神様の特別な子の内にある可能性を探しましょう。障がいを持った子どもに接するスタッフの態度が、他の子どもたちに模範を示すこととなります。

車いす、歩行器などには十分な空間が必要です。段差や障害物がないようにしましょう。障がいを持った子には、その子が持っている障がい以外の感覚を充分使ってコミュニケーションを図ります。たとえば、視覚障がいの子には、視覚以外の感覚をたくさん用いてコミュニケーションしましょう。はっきりと伝えましょう。繰り返したり、例をあげましょう。神の無条件の愛を感じられるように、温かい環境をつくりましょう。子どもたちの家族にもできるだけ加わってもらいましょう。

身体的障がい

脳性まひ、てんかんといった神経の問題、もろい骨や関節炎といった整形外科的問題、心臓疾患やぜんそくといった健康上の問題を抱えています。

- ・身体的障がい必ずしも知的障がいを伴っているわけではありません。
- ・本人やその子の両親に、丈夫なところ、弱いところ、制限などについて尋ねましょう。
- ・肯定的に励まします。過保護にははいけません。最初から参加できないとみなしてはいけま

せん。

- ・その子に合ったイスや机などを用意しましょう。

聴覚障がい

聴覚障がいには、片耳の場合と両耳の場合があります。原因は、遺伝、先天性、病気、事故などがあります。部分的な程度から全く聞こえない程度まであります。

- ・活動に参加できるように励ましましょう。取り残されたように感じないようにします。
- ・あらゆるコミュニケーション手段を用います。話、聴力補助機器、ジェスチャー、サイン、手話、パントマイム、読唇、筆記、パソコン、写真など。
- ・スタッフはよく使う用語の手話を覚えましょう。ただし、すべての聴覚障がい児が、手話を知っているわけではありません。
- ・読唇できる子に対しては、必ずその子の方を向いて明確に話します。

視覚障がい

視覚障がいは、出生前の感染、目の病気、糖尿病、中毒、感染症、けがなどによって生じます。

- ・視覚以外の感覚を最大限に活かすようにしましょう。
- ・説明を明確で簡潔にします。
- ・大活字、点字、聞くことのできる聖書を用意しましょう。

学習障がい

学習障がい児は、話し言葉や書き言葉を使ったり、理解したりすることに困難をおぼえます。こういった困難は、聞くこと、思えること、話すこと、読むこと、書くこと、単純な問題解決において起こります。多くの学習障がい児が、過活動、脳障がい、知的障がいなどと間違っ診断されていることがあります。

- ・一度に一つの指示を出します。学習障がい児は、聞いたことを順に覚えていることができない傾向があります。重要な指示は繰り返しましょう。
- ・五感を用いることができるようにします。その子がどの感覚に一番依存しているかを知りましょう。
- ・レッスンの主題を強調し、繰り返します。
- ・部屋の中の過剰な刺激をなくします。
- ・具体的でわかりやすい用語と例を用います。積極的に関わられるようにします。

知的障がい

知的障がいは、出産前、出産中、出産後の脳の損傷や病気によることがあります。程度は軽い場合から重い場合まであります。

- ・知的障がい児は、障がいを持っていない子どもと同じように学びます。五感を通し、積極的に参加できるようにしましょう。
- ・集中できる時間が短い傾向があります。さまざまなアクティビティを用いましょう。
- ・ほとんどの知的障がい児は、福音を聞き、応答することができます。聖句を注意深く分かち合います。子どもが質問し、考え、応答できるようにしましょう。

<文 献>

今井むつみ、野島久雄著『人が学ぶということ—認知学習論からの視点—』北樹出版、2003年。

ブリッジャー、フランシス著、中嶋典子訳『子どもが神に出会うとき』CS成長センター、1996年。

リチャーズ、ローレンス O.『創造的な聖書の教え方』大滝信也訳、聖書図書刊行会、1982年。

Choun, Robert J. and Michael S. Lawson, *The Christian Educator's Handbook on Children's Ministry*, 2nd ed., Grand Rapids, Baker Books, 1998.

Clark, Robert E., Joanne Brubaker, and Roy B. Zuck eds, *Childhood Education in the Church*, Rev ed., Chicago, Moody Press 1986 .

Clark, Robert E., Lin Johnson, and Allyn K. Sloat eds, *Christian Education: Foundations for the Future* , Chicago, Moody Press 1991.

〔著者紹介〕



松原 洋満 (まつばら ひろみつ)

1960年、岐阜県生まれ。筑波大学で心理学専攻。東京基督教短期大学で神学を学ぶ。アメリカ、ゴードン・コンウェル神学大学院(M.A.)、トリニティー国際大学(Ph.D.)で基督教教育を学ぶ。神奈川県川崎市にある日本同盟基督教団登戸教会牧師。東京キリスト神学校講師。2児の父。著書に「楽しい！発見&体験ゲーム」(CS成長センター)、「かがやけ☆クリスチャンキッズ」(日本同盟基督教団教会教育部、共著)、「聖書が教えている家庭生活・社会生活」(日本同盟基督教団教会教育部、共著)がある。エッセイ、メッセージ、論文などを「のぼりと教会」ホームページで公開中 <http://homepage3.nifty.com/noborito-church/>

子どものためのミニストリー

2011年8月1日 発行

著者 松原洋満

©MATSUBARA Hiromitsu 2011